東京文化資源区構想

平成２７年５月

東京文化資源区構想策定調査委員会

東京文化資源区構想

目　次

第１章　東京文化資源区構想の意義 ―――――――――――――― 1

（１）趣旨と背景
（２）対象地域地図
（３）全国的・世界的意義

第２章　都心北部（ＣＴＮ）の文化資源の特徴 ―――――― 12

（１）都心北部の文化的レガシー
（２）主要対象地域の特色と課題

第３章　東京文化資源区の具体化プログラム ―――――― 26

（１）特色ある文化資源の活用（文化プログラム）
（２）文化プログラムを実現するための環境整備（環境プログラム）
（３）地域特性に応じた対応策（地域プログラム）
（４）東京文化資源区の総合的運用と発信：「東京ビエンナーレ」の実現
（５）京都文化資源活用構想との連携と全国展開

第４章　これからの取組と推進主体 ―――――――――― 38

（１）想定スケジュール
（２）今後の推進体制：東京文化資源会議を中心に

■資料 ―――――――――――――――――――――― 42

（１）委員会名簿
（２）東京文化資源区内の文化財情報図
（３）地域文化資源連携活用のダイアグラム・イメージ：谷根千の事例

第１章　東京文化資源区構想の意義

（１）趣旨と背景

1

21 世紀初頭、世界の諸都市は、歴史的伝統や文化的創造性をもって競いあう時代に入っている。パリやロンドンをはじめ、世界有数の諸都市はその文化的伝統と知的創造を前面に出して都心部のリノベーションを進め、観光客数や文化的発信力を拡大させた。もはや単純な大規模再開発は過去のものである。グローバル化した世界における都市間競争では、都市の文化的個性の表現が果たす役割が大幅に増大する。

たしかに日本でも、金沢や横浜など、「創造都市」としての文化戦略を進めてきた都市もある。しかし東京は、世界トップレベルの文化資源や知的集積、高密に点在する多様で豊かな文化力を潜在させながら、自らの潜勢力に驚くほど鈍感であった。

むしろ、戦後東京の発展は、1964 年の東京オリンピックに向けて突貫工事で建設された首都高速道路や青山通り、代々木や駒沢のオリンピック競技場に代表されるように、都心南や西方面の交通網や大規模施設の整備を中心に進められてきた。やがて新宿西口・淀橋浄水場跡地での超高層オフィス街の建設が進み、80 年代以降になると開発の波が六本木や恵比寿、品川、汐留というように都心南地域に回帰してきた。

他方、過去半世紀の歴史を通じ、江戸時代から町人地が広がっていた都心北や東の諸地域は、概して大規模再開発には適さず、道路優先、超高層優先の時代から取り残されてきた。それどころか、1964 年の東京オリンピックに向けて川や運河の上に首都高速道路が建設されると、日本橋をはじめ貴重な文化的景観は失われた。

2

2020 年の東京オリンピックは、このような半世紀前の歴史の繰り返しであってはな

らない。なぜならば、東京の個性は人口や経済の巨大さだけにあるのではないし、新しい技術や消費文化だけにあるのでもないからだ。17 世紀からすでに世界最大の都市であった東京／江戸は、参勤交代により「諸国」の人々が集まる多文化都市であり、浮世絵や俳句から蘭学まで世界水準のコスモポリタンな町人文化を開花させ、日本近代の基盤をかたちづくった。さらに明治以降は、建築から絵画、文学、映画まで、高度に欧米とも対抗しうる文化的達成を遂げていった。

つまり、この都市にはすでに世界に誇るべき莫大な文化遺産が埋蔵されている。東京都の『東京文化ビジョン』が掲げる「伝統と現代が共存・融合する東京の独自性と多様性」とは、まさしくこのようなコスモポリタンな江戸文化やアジアと欧米の双方に開かれていた近代東京の文化に根づいたものでなければならない。

そして、この東京が内蔵する過去数百年に蓄積された文化資源の多くは、都心北地域（Central Tokyo North, CTN）に集中している。日本最大の博物館・美術館の集中地であり、東京藝大が立地する上野、学術の拠点・東大を中心とした本郷、町家が連なり、路地と長屋、寺院を楽しむ外国人観光客に人気の谷根千、湯島聖堂から神田明神、湯島天神までのルートを軸線とする宗教と料亭の街・湯島、日本の近代学術発祥の地であり、かつて孫文や魯迅、周恩来といったアジアの若き指導者たちも親しんだ私大と出版、書店の街・神保町、そして電気街に加えてマンガ・アニメ・ゲーム文化の拠点として世界的に知られる秋葉原。これらのきわめて高度な文化・芸術・学術の世界的拠点が、実はわずか半径約２㎞の徒歩圏に密集しているのである。

３

国際オリンピック委員会（IOC）は、21 世紀のオリンピックの指針として「レガシー＝継承」を重視する。この指針は、今日、世界の先進諸国が関心を向ける「創造都市＝クリエイティブ・シティ」を創出していく基盤が、文化的伝統と才能、寛容さであることに対応している。文化的伝統を大切にし、寛容さにより世界の才能を集めて

いく都市こそが、21 世紀の世界をリードするのである。そしてそのためには、その都市が蓄積する文化資源を、もう一度再生させていくことが必要である。

だからこそ、古くて新しい東京の顔として東京文化資源区の一体性を回復し、この地域を日本が世界に誇る文化芸術学術の拠点としてリノベートしていくことは、確実に東京、そして日本の文化的プレゼンスを大きく向上させるものとなる。

現在、都心北地域では、さまざまな新しい動きが生じている。谷根千では地道な地域活動が重ねられてきており、その蓄積の上に新しい構想づくりが始まっている。上野公園の博物館、美術館、大学は、連携して「文化の杜」構想の検討を進めている。東京大学では、本郷通りに向けていた東大の顔を、少しずつ上野・不忍池側にも開いていく計画の検討が始まっている。神保町では、地元書店を中心とした力強い地域組織が活性化に向けた検討を進めている。湯島から秋葉原にかけての一帯では、アーツ千代田 3331 やマーチエキュート神田万世橋をはじめ、新しい拠点施設の活動が活発化している。ばらばらだった地域が、少しずつ結びつき始めているのである。

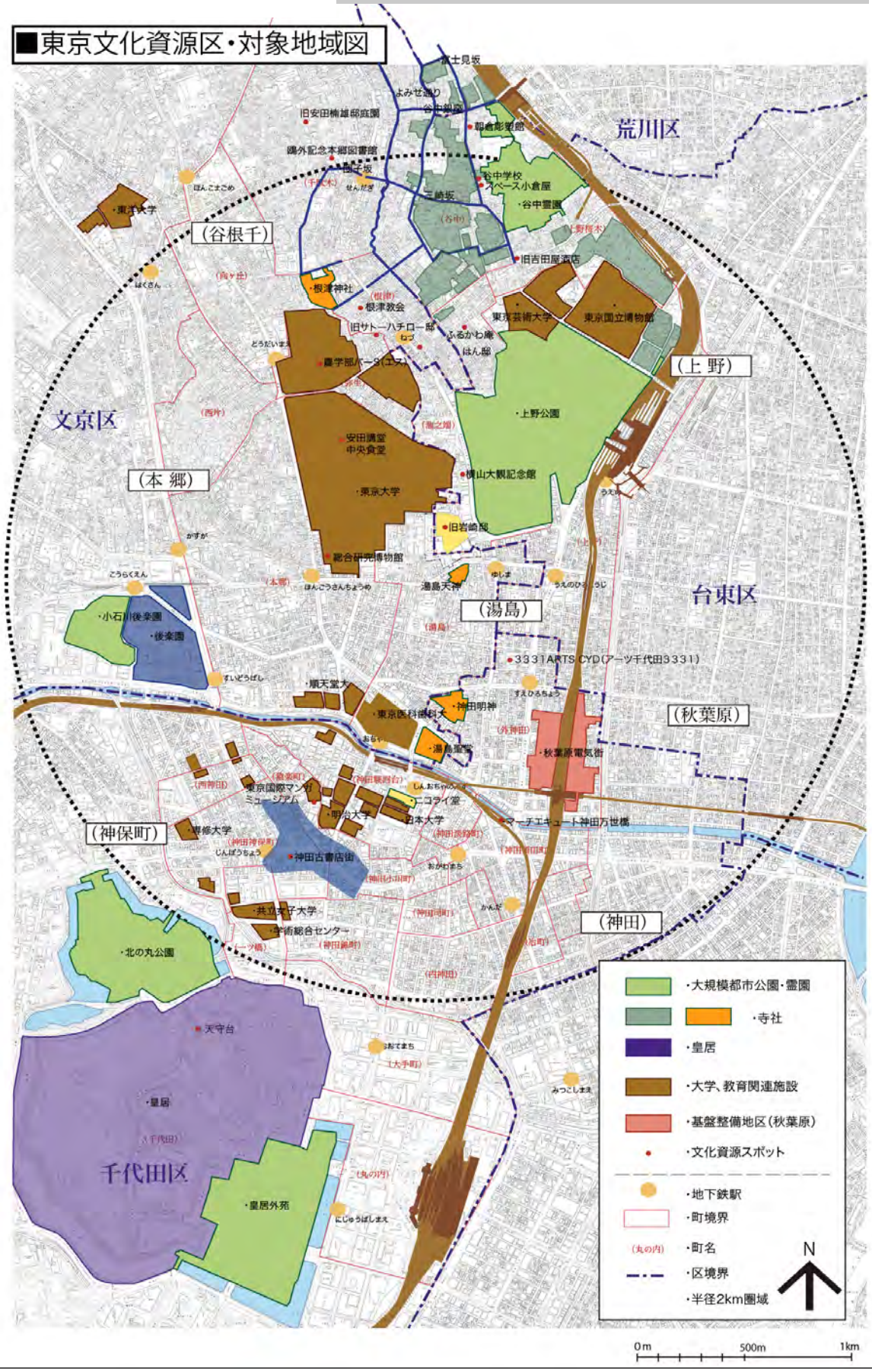
4

これらの動きのキーワードは、「つながり」である。インターネットを基盤とした情報ネットワークが高度に発達・普及し、それらが携帯端末の GPS と結びつくなかで、都市での人々の行動様式が劇的に変化しつつある。それは、どこか有名な施設の周囲に人々が集合するパターンから、ネット情報と GPS 機能を頼りに各人が自分で地点と地点を結んで移動していくパターンへの変化である。大規模施設を再開発するのではなく、きわめて多くの魅力的なポイントの間に「つながり」を形成し、それらの無数の線が結びついた「まとまり」として、21 世紀の東京を創造していくこと――そうした都市への文化的ポテンシャルを、東京文化資源区ほど集中させている地域はない。

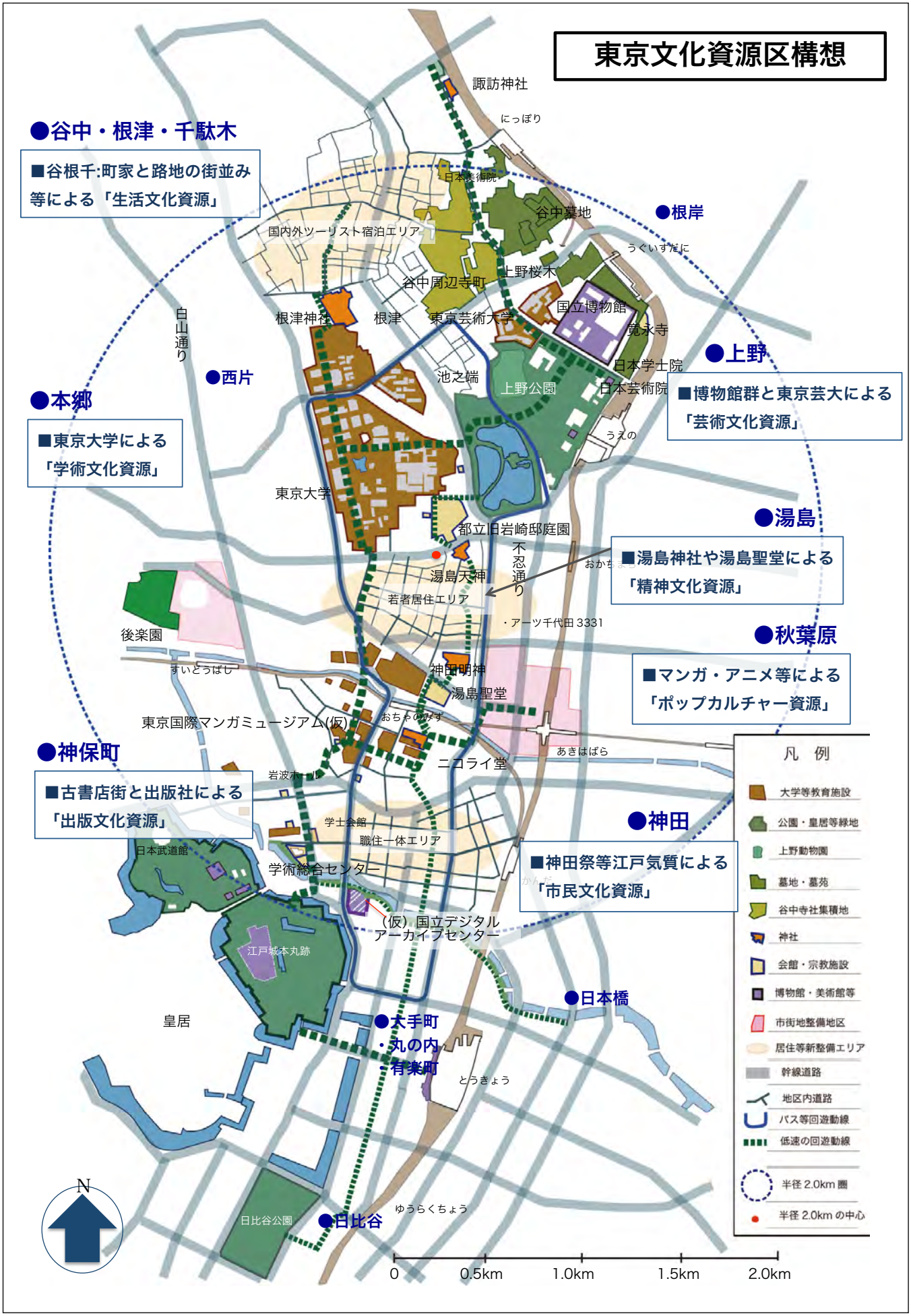
世界のなかでの東京の都市力は、人口集積や経済力だけでは支えられない。現状の東京への外国人観光客は、シンガポールよりはるかに少なく、ソウルよりもさらに少

ない。そうしたなかで、2020 年のオリンピックに向け、東京が世界の人々に強い吸引力を発揮するには、江戸・明治以来の文化や生活と結びついた他には真似のできない都心北地域の価値こそを世界に見せていくべきである。上野（芸術文化）、谷根千（地域文化）、本郷（学術文化）、湯島（宗教・精神文化）、神保町（出版文化）、秋葉原（ポップカルチャー）を結び、誰もが楽しく歩き回り、滞在し、住むこともできるようにしていくことこそ、世界のなかで東京の「レガシー」を生む中核的戦略となる。

（２）対象地域地図


■東京文化資源区・対象地域図
荒川区
文京区
台東区
千代田区
（谷根千）
（上 野）
（本 郷）
（湯島）
（秋葉原）
（神保町）
（神田）
・東京大学
・上野公園
・東京国立博物館
・東京藝術大学
・根津神社
・谷中霊園
・小石川後楽園
・後楽園
・順天堂大
・東京医科歯科大
・神田明神
・秋葉原電気街
・明治大学
・日本大学
・専修大学
・神田古書店街
・共立女子大学
・学術総合センター
・北の丸公園
・皇居
・皇居外苑
・大規模都市公園・霊園
・寺社
・皇居
・大学、教育関連施設
・基盤整備地区（秋葉原）
・文化資源スポット
・地下鉄駅
・町境界
・町名
・区境界
・半径2km圏域
N
0m
500m
1km

東京文化資源区構想


●谷中・根津・千駄木
■谷根千:町家と路地の街並み等による「生活文化資源」
●根岸
●上野
■博物館群と東京芸大による「芸術文化資源」
●本郷
■東京大学による「学術文化資源」
●西片
●湯島
■湯島神社や湯島聖堂による「精神文化資源」
●秋葉原
■マンガ・アニメ等による「ポップカルチャー資源」
●神保町
■古書店街と出版社による「出版文化資源」
●神田
■神田祭等江戸気質による「市民文化資源」
●日本橋
●太手町・丸の内・有楽町
●日比谷
諏訪神社
にっぽり
日本美術院
谷中墓地
国内外ツーリスト宿泊エリア
うぐいすだに
上野桜木
谷中周辺寺町
国立博物館
根津神社
根津
東京芸術大学
寛永寺
白山通り
日本学士院
池之端
上野公園
日本芸術院
うえの
東京大学
都立旧岩崎邸庭園
不忍通り
おかちまち
湯島天神
若者居住エリア
・アーツ千代田 3331
後楽園
すいどうばし
神田明神
湯島聖堂
東京国際マンガミュージアム(仮)
おちゃのみず
あきはばら
ニコライ堂
岩波ホール
学士会館
職住一体エリア
日本武道館
学術総合センター
かんだ
(仮)国立デジタルアーカイブセンター
江戸城本丸跡
皇居
とうきょう
ゆうらくちょう
日比谷公園
凡例
大学等教育施設
公園・皇居等緑地
上野動物園
墓地・墓苑
谷中寺社集積地
神社
会館・宗教施設
博物館・美術館等
市街地整備地区
居住等新整備エリア
幹線道路
地区内道路
バス等回遊動線
低速の回遊動線
半径 2.0km 圏
半径 2.0km の中心
N
0
0.5km
1.0km
1.5km
2.0km

（３）全国的・世界的意義

① 東京と東北のコンタクトゾーン

2020 年の東京オリンピック開催は、東日本大震災からの復興というテーマを前面に掲げることで初めて世界の支持を得ることができた――このことを、私たちは忘れてはならない。「東京で、もう一度オリンピックを」という日本の希望を世界が支持したのは、けっして東京だけの力や魅力によるのではなく、震災からの東北の復興を、真に世界が願ったからである。だから私たちは、2020 年のオリンピックとその後の東京の未来を、東北の未来と連帯できるかたちで考えていかなければならない。

東京文化資源区は、東京のなかでも東北との結びつきが特別に強い地域である。日本の近代化を通じ、東京は東北から出稼ぎや集団就職の形で膨大な人口を吸い寄せてきた。彼らの多くは鉄路でまず上野駅に降り立ち、上野から主に台東、墨田、江東などの下町一帯、あるいは池袋や新宿方面に散っていった。上野は圧倒的な数の東北出郷者にとって東京の玄関口であり、また故郷への出入口だったのである。

他方、江戸から明治への変動で、徳川の幕臣が薩長に敗れて逃れていった先も、上野から会津、東北、函館というルートであった。これに対して「西洋」は、幕末から戦後まで、南ないし西から東京にやって来た。ペリーが来航したのは浦賀であり、薩長軍は箱根を超えて進軍してきた。戦後、マッカーサーが降り立ったのも厚木で、これらはすべて神奈川方面から東京に向かう道をたどる。近世は都心北部から東北へ逃れ、近代は東海道・神奈川から都心南部へと入ってきたのである。そうした意味で東北は、西洋的な東京よりも、江戸的な東京と深い結びつきを持っている。

つまり上野を中心とする都心北は、近代を通じて東京と東北のコンタクトゾーンであり続けた。「東京」と「東北」は二項対立的な関係にあるのではない。上野を中心とする一帯は、東京（都心）でもあり、東北（地方）でもある両義性を備えた地域なのである。江戸のコスモポリタニズムは、欧米一辺倒となる近代日本の西洋信仰とは異

なり、地方の多様性に開かれたものであった。そのような東京と地方の相補的・相乗的な結びつきを、東京文化資源区を媒介に再創造していくことができる。

②ブラックホールからの脱却

加えて言えば、東京に必要なのは東北との連帯だけではない。日本には現在、止まらない人口減で存続自体が困難になるのではないかとされる900に及ぶ市町村が存在する。つまり、地域で中核的機能を担ってきた市町までもが、21世紀の間に消滅してしまうかもしれないのだ。この衝撃的な予測を受けて地方創生の声が喧しいが、真の地方創生は東京との連携なしにはあり得ない。なぜなら、東京圏は物価高や子育て環境の悪さ等から出生率が低く、全国から膨大な人口を吸収しながら子どもが増えない巨大なブラックホールのような存在であるからだ。東京が巨大なブラックホールとして地方からの人口を吸収し続ける限り、地方の創生も自立も難しいのである。

東京が巨大なブラックホールから脱するため、東京都心で大規模再開発を続けることはけっしてプラスにならない。東京での大規模開発とバランスをとるかのように地方ではカンフル剤的な公共土木事業が進められてきたが、このような土木事業依存型の経済全体が、地方都市をますます困難な状況に陥れてきたのである。この流れを変えるには、江戸以来の蓄積されてきたレガシーを着実に未来のクリエイティビティにつなげるような、新しいまちづくりの戦略が必要である。つまり、スクラップ・アンド・ビルド式の大規模再開発ではなく、すでにあるものを生かし、地域全体をリノベートする戦略とその組織化された手法を発展させていかなければならないのだ。

③近代アジアのなかの東京

東京文化資源区はまた、東京が東北と結びついた都市だっただけでなく、近代アジアの中核都市でもあったことを示している。この場合、焦点となるのは神保町から本郷にかけての一帯である。とりわけ神保町は、近代中国の知識人に特別な影響を与え

た街であった。たとえば東北大学の医学生としては挫折した魯迅が東京に舞い戻り、住みついたのは湯島であり、彼は神保町の書店街で本を読み漁るなかで近代アジア最大の文学者に転身していった。同じく旧制一高や高等師範の受験に失敗した若き周恩来が下宿したのも神保町で、彼が通った神保町界隈の中華料理店は今日も知られている。神保町は、近代中国の文化的原基の一つだったと言っても過言ではない。

今日、東京文化資源区は、世界のポップカルチャーとも結びついている。というのも、「秋葉原＝Akihabara」の地名は、そのアニメやゲーム文化との結びつきによって、現在では東京のなかの他のどの地名よりも世界の若者になじみ深いものである。さらに、秋葉原電気街は中国等からの膨大な買物客を日々吸収している。しかしこれまでのところ、この秋葉原の世界性は、近代日本を通じた神保町や上野の世界性と結びついてはいない。それぞれの全国性、世界性がばらばらなのである。

④文化資源区の具体戦略

このように東京文化資源区は、これを構成する各地域に卓越した世界性・全国性を潜在させているが、このままではそれぞれがばらばらで全体として可視化されることはない。キーワードである「つながり」が、まだ実現してはいないのである。これを変えて、文化資源区全体を世界性と全国性、歴史性を持った創造地区として発展させていくには、少なくとも、①世界からのまなざし、②特区的な行政措置、③草の根的な文化ムーブメントの３つが必要である。2020 年の東京オリンピック開催は、このような３つの要素が同時に揃うのを可能にする恰好のチャンスといえよう。

そのため東京文化資源区では、2020 年の東京オリンピックを一大モメントとして視野に入れつつ、次のような具体戦略を展開していくつもりである。そうして地域全体の「つながり」を、21 世紀の東京のレガシーとクリエイティビティの創出につなげていくのである。すなわち、①ものづくりと知識・アートが出会う新たな場の創造、②民官産学を横断した交流・創造体験による地域創造人材の養成、③公共アーバンラボ

の設置による、アート×産業×コミュニティの相乗効果を可能にする地域のインキュベーション拠点づくり、④地域の伝統的・歴史的知識資源を蓄積・編集するアーカイブの構築と活用、⑤建造物、景観、河川等の歴史・文化・環境資源の保全と再活用、⑥それらの前提となる域内文化資源の洗い出し・見える化、これである。

⑤文化資源区という価値創造

これらの基本戦略は、東京でなければ実行できない類のものではない。同じように文化資源を有する多くの地方都市で、多様な文化資源区構想が可能である。したがって、京都文化資源区や福岡文化資源区、仙台文化資源区、金沢文化資源区、高知文化資源区などの全国の諸文化資源区のネットワークを考えていくことができる。東京文化資源区は、すでに動き出している京都文化資源特区構想とともに、そうした全国的展開のモデルとなることができるし、そのようなものとして構想されている。

2020 年の東京オリンピックで、日本は明治維新から約 1 世紀半余の歴史を経たことになる。この過去 150 年の前半分は、近代化・軍国化の 75 年、後半分は、復興と高度成長、成熟化の 75 年であった。東京は、この 1 世紀半に及ぶ近現代日本の中心であったし、これからもそれは続く。東京は現在、この過去 1 世紀半の近代化の歴史を経た折り返し地点に立っている。東京文化資源区は、私たちを呪縛してきた都市と開発、文化についての既成の枠組を、文化資源の活用と地域のリノベーション、クリエイティブな価値創造を中核コンセプトへと転換させる挑戦である。

東京文化資源区は、21 世紀の東京の未来的価値を、大規模化、高速化、高層化、画一化といったベクトルの先にではなく、中小規模のリノベーションを積み重ね、低速の地域間交通を再評価し、地域ごとの文化的多様性を最大限生かしていくようなベクトルの先に創造しようとしている。こうしたビジョンは、巨大資本の投資を前提にしていないがゆえに全国各地に転用可能で、この点で、本構想は国内外の多くの歴史的

都市と連携していくことになる。これから 2020 年まで、地域と地域、都市と都市をつなぐ多数の実践が、文化資源区構想として全国展開されていくことになろう。

第２章　都心北部（ＣＴＮ）の文化資源の特徴

（１）都心北部の文化的レガシー

①江戸のコスモポリタニズム

東京都心北部（Central Tokyo North, CTN）は、かつて江戸の宗教や学問、商業の中心的な地域であった。上野・谷中には寛永寺の大伽藍が聳え、多数の寺院が密集し、その宗教文化は湯島天神から神田明神まで連なっていた。他方、湯島には学問の拠点たる聖堂があり、その南の神田一帯では町人文化で栄えていた。江戸は参勤交代により「諸国」から武士や奉公人の集まり、異文化が交流する多文化都市で、都心北の神田や上野、都心北東の浅草、両国にはそうしたコスモポリタンな文化交流の華やかさがあった。そこでは、「諸国」に息づく多様な文化とつながりつつ、俳諧や浮世絵、歌舞伎などの「都会」の文化が創造されていた。

明治維新後、文明開化のうねりの中で、都心北は西洋文化を取り入れながらも江戸を引き継ぎ、独自の知や芸術を醸成する知と文化の一大拠点となる。日本を代表する博物館・美術館、動物園が集まり、東京藝大が立地する上野と、学術の拠点・東京帝国大学を中心とした本郷、それに多数の私立大学が集中し、学生や知識人相手とする書店、出版社として発展する神保町が、この地域の文化的求心力の基盤となった。

②神保町・近代学術発祥の街

この求心力の一方の極は神保町にあった。官学、私学を問わず、東京の大学・専門学校の大多数は、築地でなければ神保町で誕生している。外国人居留地だった築地からは、後の立教大学や明治学院、青山学院が始まっているし、慶應義塾も創立は築地鉄砲洲である。他方、明治初期の神保町には、東京大学や一橋大学、東京外国語大学から学習院大学、明治大学、専修大学、法政大学、中央大学、獨協大学、日本大学などの官学、私学が集中していた。ほどなくこの大学街・神保町の周囲に書店街が発達

し、関連する出版社や印刷所も多く設立され、出版文化の中心は幕末までの京橋から神保町に移動する。

その後、東京大学は本郷に、学習院大学は目白に拠点を移し、神保町は法律系の私学中心の街となっていくが、大正から昭和にかけては魯迅から周恩来までが中国人留学生として神保町周辺に滞在した。西洋文明を取り入れながら、それを漢語を基礎にした江戸のコスモポリタンな武士文化と融合させ、アルファベットではなく漢字の概念で近代世界を表現することを可能にしたのは、かなりの部分、神保町を中心にした近代東京の知的リテラシーの高さであった。そしてそれが、卓越した中国人留学生を媒介にして東アジア世界全体に広まっていったのである。

昭和になると、大学生の人口も増加し、そうした学生たちは早稲田や三田でなければ神保町から本郷にかけての一帯に集中していたから、都心北の学生文化もより爛熟したものになっていた。学生たちも帝大生から私立専門学校生まで様々で、神保町は学生に関連する文化産業、出版のみならず音楽、スポーツまでの各種の商店の集積地となった。さらに言えば、マンガ・アニメもそうした神保町の学生・出版文化からスピンアウトしていった文化の一つであり、原基は神保町の書店街にあると考えなければならない。出版、音楽、スポーツ、マンガ・アニメは、すべてもともと東京に上京してきた学生の文化であり、「書生の街」東京のエッセンスなのである。

③上野・華やかなイベント空間

さて、東京文化資源区のもう一方の重心は上野である。上野を寺領とした寛永寺は徳川本家の菩提寺として、江戸で最も格式が高い寺だった。だからこそ、江戸城が無血開城された後に彰義隊は上野に立て籠もったのであり、そこに新政府軍は砲弾を本郷から打ち込んでいった。その結果、上野一帯は焼野原となったが、これは関東大震災や第二次世界大戦に先立ち、東京が焼野原となった最初の経験であった。

焼野原の上野は、やがて博物館、美術館、動物園などが集中する日本最大のミュー

ジアム・パークとなっていった。契機となったのは内国勧業博覧会の開催で、明治から昭和までを通じ、上野の博覧会は博物館の並ぶ丘の上から不忍池畔全域をつないで開催されていたから実に華やかなものであった。戦前までの上野は、東京最大の巨大なイベント空間であり、博覧会や展覧会、音楽会はもとよりのこと、不忍池は日本初の飛行機の滑空やボートレース、マラソン選手権の会場ともなった。

近代上野の文化を特徴づけていたのは、このような華やかな近代イベント空間としての上野公園と、その周辺で息づき続けた寛永寺以来の江戸情緒を残した下町的空間のはっきりとした二層構造であった。上野公園の中にわずかに残された寛永寺の遺産は、動物園に囲い込まれてしまった五重塔をはじめ、いまだにその本来の姿が隠されたままになっているが、江戸の宗教文化の一部は湯島の寺社、湯島天神や神田明神などに残り、地域の人々はもちろん、シーズンともなれば全国の受験生や観光客に親しまれている。そしてその近辺には、神田教会や本郷教会からニコライ堂までのキリスト教系の宗教施設も集まってきた。さらに、谷中・根津・千駄木の町並みと生活は、関東大震災や第二次世界大戦の災禍を越えて、今日まで生き残っていった。

④学生と出版の街／芸術と宗教の街

このように、東京文化資源区は、神保町から本郷、秋葉原まで広がるの「学生と出版の街」としての東京と、上野から湯島、谷根千まで広がる「芸術と宗教の街」としての東京という２つの文化力の磁場が結びついたことで成り立っている。

そして、この２つが結びついた地域の広がりを毎日のように歩いていたのが、森鴎外や夏目漱石、正岡子規、樋口一葉、石川啄木、尾崎紅葉、幸田露伴、二葉亭四迷などをはじめとする文人たちであった。たとえば森鴎外の小説『雁』には、鴎外自身と重なる主人公の毎日の散歩ルートが詳しく書き込まれているが、散歩の範囲は本郷から上野、谷中、湯島、秋葉原、神保町の全域に及んでいる。若き鴎外は、東京都心北部のほぼ全域を、ほとんど毎日のように歩いていたのである。自動車交通も少なく、

路地が縦横に張りめぐらされていた明治の東京は、歩くことが経験につながる街であった。そして鴎外が歩いていたこれらの地域は、学術、文芸、宗教など様々な面で江戸の遺産を東京につないでもいた。明治から昭和までの文人たちがこの都心北地域をどのように歩いていたかを具体的に検証し、重ねていくことで、未来の私たちがこの地域をどう経験していくことができるか想像したい。

⑤都心北・東から都心南・西へ

これほど歴史的にも文化的にも豊かな資産を内蔵する都心北地域はしかし、戦後の東京の発展の歴史のなかでは疎んじられてきた。戦後東京の発展は、港区や渋谷区を中心とする都心南及び西地域を中心に進められてきたのである。

もともと大名下屋敷が多かった都心南には、戦前、旧日本軍施設が多く散在し、それらが戦後に米軍接収後、大規模な公園整備や都市開発の基盤となった。旧日本軍の拠点が世田谷、多摩、相模原へ西方展開するなかで公園化や道路整備が進んだところもある。1964 年の東京オリンピックは、そうした大規模用地に支えられて実現した。

当時、オリンピック開催を控えた東京にとって、最大の難題は交通問題だった。東京は激増する自動車交通に対応できず、ひどい渋滞に悩んでいた。訪日する選手団や外国人のため、羽田空港と競技場をつなぐ交通の高速化は至上命題だった。こうして羽田から湾岸を経て都心へ、さらに初台に抜ける首都高速が最優先で建設された。国道 246 号線と環状 7 号線の整備も進んだ。当時、強調されたのは、自動車社会への対応であった。オリンピックがスピードの争いであるのと同様、開催都市は高速道や高速鉄道で縦横に結ばれなければならないと考えられた。そのために、路面電車を廃絶し、歩道を縮小し、都心の新築ビルの 1 階は駐車場にすべきだと真面目に主張されていた。車がハイ・スピードで行き来できる都市こそ「理想の都市」とされたのである。やがて運河や川の上に高速道路が建設され、鉄道も高架となった。東京オリンピックは東京の交通網の高架化を決定づけた。その結果、日本橋など多くの江戸以来の景観

が破壊され、古い町は分断された。

やがて高架化・高速化する東京に対応し、大規模再開発が続いたのが西新宿から六本木、新橋や品川までの地域であった。1964 年のオリンピックは、東京の重心を、日本橋・神田以北から六本木や新宿・代々木などに南下させた。五輪で整備された道路や地下鉄は、この南下にプラスに作用した。南下は東京の高速化、大規模化に対応した動きだった。

⑥分断されていった都心北地域

これに対し、江戸時代から町人文化の中心地だった都心北は、区画が細かく、大規模開発には適さなかった。1964 年の東京オリンピックから今日に至るまで進められてきた大規模再開発の波には概して乗らなかったこの地域は、やがて新しい東京から取り残された地域とみなされるようになった。今日、東京文化資源区を構成する諸地区の結びつきは見失われ、来街者の回遊性はなく、地区を結ぶ交通アクセスもない。東京都民でも、これらの地域がこれほど近接していることに気づいていない人が多い。

また、上野や本郷と秋葉原や神保町の間には湯島があるが、南北軸の湯島天神と神田明神、湯島聖堂がつながれていない。歩ける道、座れる場所が少ないのも、地域のポテンシャルが生かされない理由である。これらの地域をつないでいくには、自転車・歩行者を対象とする遊歩道の設置、地区内の 3 区を横断するコミュニティバスの統合運行、路地のネットワーク化等が必要だが、今はまだそうした計画一つとして議論の俎上にすら上っていない。地域の一体性が、見失われたままなのである。

⑦都心北の潜在的文化資源

それでもなお、21 世紀の東京の文化資産は、都心北に集積している。この一帯には、今もなお、くつろぎの森としての上野公園を中心に、谷根千記憶の蔵、芸工展、art-Link 上野谷中、鴎外図書館、ファーブル昆虫館、不忍ふれあい館、朝倉彫塑館、大名時計

博物館、横山大観記念館、それに正岡子規、夏目漱石、森鴎外、幸田露伴、樋口一葉、宮城道郎などのゆかりの場所や、寛永寺、神田明神、根津神社、ニコライ堂、湯島天神、神田教会などの宗教施設、根津神社の湧水や谷中の蛇道から万世橋から水道橋にかけての水路などの景観的にポテンシャルの高い地域資源にあふれている。

これら一つひとつは中小規模だが、そうした数多の拠点をつなぎ、リノベーションをネットワーク化して地域の個性を創造していくという未来的可能性を示している。私たちが構想しているのは、東京都心北に埋蔵されている無数の文化資産を、それぞれの地域を結んでいくことで 21 世紀の東京に再生させていくことである。

東京文化資源区は、観光のような短期的な滞在だけでなく、中長期の滞在プログラムが可能な基盤も有している。すでに多くの外国人宿泊客が集う谷根千地区（国際ツーリスト・ビレッジ）に加え、湯島地区（国際アカデミック・ビレッジ）に若者や外国人留学生・旅行者等が比較的廉価に中長期宿泊・居住できる機能を整備し、地域内で衣食住学遊が充足できるようにしていきたい。さらに神田地区は、かつてそうであったように、職住一体となったまちづくりをめざすべきである。結果的に、かつての文人たちのコスモポリタニズムを、21 世紀のグローバルなクリエイティブ・シティにつないでいくのである。

⑧レガシー＝継承としてのオリンピック

2020 年、東京オリンピックのテーマは「レガシー＝継承」である。このテーマはおのずから過去半世紀に東京が歩んできた道への反省を迫る。高速化、大規模化する東京の先にあるのは巨大な荒廃かもしれない。国全体が人口減少に悩む中で、東京だけがメガ級のオリンピック都市となることに、私たちはもう希望を持てない。5 年後の東京オリンピックに求められるのは、半世紀前とは全く異なる都市の価値を発見し直すことである。そのためには、東京は世界の人々に対し、文化や生活の面で他のどこにも真似のできないオリジナルな価値を見せていかなければならない。

上野（芸術文化）、谷根千（地域文化）、本郷（学術文化）、湯島（宗教文化）、神保町（出版文化）、秋葉原（ポップカルチャー）の都心北地区＝文化資源区を、誰しもが楽しく歩き回り、滞在し、住むこともできるようになれば、この徒歩圏は、未来の東京の文化・生活面での価値の中核となろう。それはまた一極集中に帰結しない東京の価値を発見し、地方都市と連携し、各地で文化資源区構想を進めていく基盤になるはずである。

（２）主要対象地域の特色と課題

①本郷

【特色】

A) 東京大学を中心として大学関係者、研究者、学生が集う日本屈指の文京地区

B) 現在は、本郷三丁目・東大前・春日駅のほか後楽園駅、御茶ノ水駅、上野駅、根津駅、湯島駅も徒歩圏内である。

C) 微地形によって台地と低地部分に地形的に区割りされており、台地部の北側には、江戸時代の大名屋敷の敷地割りを継承しており、東京大学や都心から最も近距離にある第一種低層住居専用地域であり良好住宅地として有名な西片もある。南側は、下級武士の組屋敷が多かった。

D) また、江戸時代から本郷通り添い（現１～６丁目）には町家が立ち並んでいた。特に、「本郷も兼康までは江戸のうち」との川柳があるように、本郷三丁目の交差点の南側は商人の町として栄えていた。

E) 文京区ゆかりの文人も多く、多くの文学史跡が多数残る。

F) 赤門をはじめとして歴史的建造物の並ぶ本郷キャンパスは観光スポットとしても知られ、多くの修学旅行生や海外からの観光客も訪れている。

G) 地域には歴史的建造物（木造の旅館、近代建築の洋食屋）などが散在している。また、低地部分には、共用の井戸を残した路地がのこっており、文学史跡、東大などを含めて「まち歩き」の有名なスポットの一つである。

H) 域内・近傍にトーキョーワンダーサイト本郷（東京都）や湯島天神・神田明神などの文化拠点が存在している。

I) 湯島地区、上野地区、根津地区、小石川地区などは徒歩での移動が可能である。

J) 本郷通り沿いの敷地には都市計画道路が指定されており、２階までを軽量鉄骨などの構造で形づくり、上部はセットバックした独特の街並みを形成している。

K) 以前から商店街を中心とした地域活動が存在していたが、近年「街 ing 本郷」という NPO が高齢化や地域自治組織の弱体化に対応した活動を展開している。

【課題】

A) 東大と地域コミュニティの関係が希薄。

B) 東大の膨大な文化資源が社会的に十分活用されているとは言い難い。

C) 上野公園、谷根千、駿河台、湯島などに近接しているが、つながりが薄く、街歩きの中で本郷キャンパスを通り抜けるルートが明確になっていない。

D) 東大の来訪者に対して、利用可能な施設や学術資源がわかりにくい。

②谷根千

【特色】

A) 不忍池、根津の谷を挟んで上野と本郷の台地に広がる坂と緑の眺望景観。

B) 江戸・東東京人の生活文化を体験・交流できるまち。江戸時代からの寺町谷中、根津権現の門前町根津、明治期からの屋敷町千駄木、上野桜木、向ヶ丘・駒込の寺町など、江戸・明治からの特徴ある地区群。震災・戦災を免れた場所では、明治大正昭和の住まいや暮らしが今に生きる。町内会活動、神社の伝統的祭りもしっかり運営される。

C) 江戸の文人墨客、明治の文豪、近現代乃芸術家、アーティストが行き来した町。芸術文化を支える人々、職人の生業、暮らしも続く。

D) 近年、下町散策地として観光化。住文化の保全を望む内外の声が高い。谷中銀座の集客：平日 7,000 人/日、土日 14,000 人/日(谷中銀座 hp)

E) 外国人観光客増加。「外国人が訪れてよかった場所 30 選 2013」に選ばれる。外国人が求めるのは寺と木造家屋、路地だけでなく、暮らす人との交流、生活感。

F) 学生のいる町：東京大学、東京藝術大学、東洋大学等に近く、学生や卒業生の店舗利用、地域との交流、居住も多い。

G) 域内に寛永寺、根津神社、岩崎邸、旧安田邸などの歴史文化拠点、朝倉彫塑館、横山大観記念館、SCAI THE BATHHOUSE、旧平櫛田中邸などの芸術文化拠点が多い。ギャラリー、現代アートスポットも増える。

H) まちじゅうの文化資源・生活文化資源をつなぐ「芸工展」、「art-Link 上野谷中」、「不忍ブックストリート・一箱古本市」など文化ネットワークが盛ん。

【課題】

A) 都市計画的には不燃化対策が優先され、不燃化特区にもなり、歴史的建造物や路地の保全についての行政主導は難しい状況。防災とともに、京都や神戸の例を参考にした歴史的建造物や路地を活かせる制度事業が必要。

B) 相続等をきっかけにした歴史的建造物の建て替えが急ピッチで進む。

C) 国内外の観光客の増加に伴い、住民生活との軋轢が生じる可能性がある。

③神保町

【特色】

A) 古書を含めた出版物・出版関連団体の集密度は世界一である。

B) 民間レベルの知的人材（編集者、古書店主、古書店利用者など）が集積している。

C) 中華料理、カレー、蕎麦屋など個性的かつ歴史のある飲食店が多い。

D) 「神保町を元気にする会」「神田古書店連盟」など、その特色を活かす自治的な組

織が活発に活動している。

E) 「神田」から「神保町」へのブランド切り替えが成功し、古書店、飲食店等の新規開店が増えている。

F) 明治大学、日本大学、専修大学、共立女子大学、アテネフランセ、国立情報学研究所等、周辺に多くの学術機関がある。

G) 明治大学による「東京国際マンガミュージアム（仮)」構想が検討されている。

【課題】

A) 訪問客は年々増加傾向にあるが、まだ中高年男性が中心。近年女性・若者が少しずつ増加しており、それを伸ばしていく工夫が必要。

B) 来訪者の増加と裏腹に、出版不況の影響か、書店、古書店で売り上げ減の傾向がみられる。

C) 外国人に対する古書店・書店等の外国語表記・案内がほとんど手つかずの状態。

D) 古書店の多くが、週日の夜早く閉店し、日曜も閉まっている店が多い。せっかくの出版文化資源が活かしきれていない。

E) 本来なら本の街・神保町の顧客となる大丸有、日本橋、駿河台などの近接地域からの人の流れが引き込めていない。

F) 映画館は岩波ホールと神保町シアター、劇場は神保町花月のみで、カザルスホール閉鎖後はコンサートホールがなく、文化活動の拠点が少ない。

④秋葉原

【特色】

A) アニメやゲーム，マンガ，ガジェット（スマートフォンやデジカメその他電子機器等）とこれらに関連する分野（同人誌、フィギュア、トレーディングカード、メイド喫茶等）に関する小売店舗について，世界最大規模の集積があるが、雑居ビル内の小規模店舗が主であり，大規模店は少ない。

B) 規模は小さいが同様の集積がみられる池袋と比して，男性向けの傾向がある。

C) 外国人観光客は約200万人／年との報道もあり、その国際的な知名度からすれば、さらなる増加が見込める。

D) 秋葉原近接の各鉄道駅の1日平均乗降人員数は，計40万人／日以上(2012)ある。

E) 大規模電器店に加え、最盛期からは少なくなったが，オーディオや電子部品，PC店舗も相当数存在する。

F) 域内・近傍にアーツ千代田3331（末広町）やマーチエキュート神田万世橋，神田明神，湯島聖堂などの文化拠点がある。

【課題】

A) 電器店、アニメ・ゲーム店、地元商店等が連合して秋葉原全体の発展に取り組める仕組みがない。

B) 訪問客層がいわゆるオタク層及び電気製品購入の外国人にかなり特定化しているが、文化資源的には、中高年、女性にも十分アピールする可能性がある。

C) 訪問客の誰でもが立ち寄れる中心的拠点がない。

D) マーチエキュートやソラシティの開業、上野黒門町周辺の飲食店増加などにより、距離的に近い神保町や上野からの訪問客の増加が見込めるが、そのためには何らかの仕掛けが必要。

⑤上野

【特色】

A) 江戸時代には徳川将軍家の菩提寺である寛永寺が建立され、門前町が形成された。明治維新後に初めての都市公園となる。数々の博覧会の会場となり、博物館・美術館等の文化施設、芸術系の高等教育機関が設置され、文化芸術の近代化の一翼を担う。

B) 1883 年に上野駅が開業し、以降東京の北の玄関口として栄えるようになる。

C) 上野公園と周辺は、現在、日本を代表する博物館・美術館・動物園、ホール、そして音楽・美術分野を牽引してきた東京芸術大学などが立地し、芸術文化資源の一大集積地となる。ロンドン、パリ、ベルリン、ニューヨーク等の世界の諸都市と較べても有数の規模を誇る。観光客数は約 2,033.5 万人（平成 24 年 台東区推計)。各文化・教育施設等への入場者数は年間 1,300 万 人を超える(平成 24 年度実績)。

○主な文化芸術機関（順不同）

東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、恩賜上野動物園、東京都美術館、上の森美術館、国立国会図書館国際子ども図書館、台東区立下町風俗資料館、日本藝術院、日本学士院、東京文化会館、東京藝術大学（東京藝術大学美術館)、旧岩崎庭園

D)文化施設の所管は国、都、区、民間と様々であるが、施設間連携の取組は重ねられている。今後は、世界に発信できる芸術文化地区としてより本格的な取組が期待される。

○主な連携組織

上野の山文化ゾーン連絡協議会、上野ミュージアムウィーク実行組織連盟、
ミュージアムスタートあいうえの、上野「文化の杜」新構想推進会議

E)文化施設が集積する上野の「山」とアメ横等に代表される商業地の「町」との連動を図る試みもされている。また北側に谷中・千駄木・根津が控え、上野との相互

の魅力を楽しむため、回遊する国内外の旅行者が近年増加。

F)外国人旅行者が訪れる都内の１０地域のなかで平成 24 年度、２５年度は７位。東京都はこの１０地域を観光案内機能の向上のための重点整備エリアとしている。

【課題】

上野地域では、「上野『文化の杜』新構想推進会議」が発足し、芸術文化資源を土台にした今後のあり方について検討を開始している。2014 年 8 月にワークング・グループが中間報告を発表した。東京都は 2015 年 3 月末に「東京文化ビジョン」を策定し、この中で上野「文化の杜」新構想の今後の整備・充実方針を次のように整理している。

ソフト面・・・文化交流の国際ハブ（拠点）形成や日本文化資源の発信の機能強化

〇広報活動や国際化への強化策

・ポータルサイトの構築・国際空港における広告、宣伝

・多言語化（広報誌や音声ガイド等）

・入場券購入の多様化（クレジットカード等）

〇集客の強化策

・IC カード等を使った各機関共通パス

・教育と関連づけた「体験型のイベント・ワークショップ」開催

・共同フェスティバルの開催

・無料開放日、休館日の見直し等

〇連携の強化策

・企画、運営を委託する NPO 法人等の設立

・フリー「Wi-Fi」の導入等

〇人材育成・高度学芸員の育成

・事務職員等の資質向上（人事交流）等

〇その他

・国立西洋美術館の世界遺産登録への協力

ハード面・・・上野公園の歴史・自然環境や景観を守りつつ、年間来訪者数 3,000 万人を迎える体制を強化

〇周辺環境の整備

・上野駅公園改札口の移動

東京文化資源区構想を今後実現するにあたり、東京都等による上野地区の拠点整備の動きと緊密に連携し、他の地区と軌を一にして課題に取組む必要がある。

⑥湯島

【特色】

A) 4 丁目（春日通り北側、旧岩崎邸西側）は民家が中心で住宅街の佇まいを色濃く残している。湯島天満宮（湯島天神）が所在する 3 丁目はマンションが多く、ラブホテルが点在する状況。2 丁目はオフィス・商業ビルが中心。1 丁目は東京医科歯科大学と湯島聖堂で大部分を占めている。

B) 3 丁目の中心部を南北に崖地が走っており、かなりの高低差が存在。

C) 湯島天満宮（湯島天神）周辺には伝統ある飲食店が存在。

D) 3 丁目崖上から 2 丁目にかけては、マンションの乱立で開発し尽くされた印象すらある現状。

E) 域内・近傍に旧岩崎邸、アーツ千代田 3331（末広町）や神田明神、湯島聖堂などの文化拠点。東京大学、上野公園と秋葉原、御茶ノ水、神保町をつなぐ要衝に位置しており、湯島を拠点とすれば文化資源区内各地域へのアクセスは極めて良好である。

【課題】

A) 湯島全体の街としての統一イメージが希薄。

B) 飲食店を含め魅力ある文化スポットは点在するが、来訪者にとってわかりにくい。

C) 上野等各地域へのアクセスの便利さから、留学生やバックパッカーを中心とする外国人旅行者の居住・宿泊地域への転換が望まれるが、地代が高止まりしている。

⑦神田

【特色】

A) 東京都千代田区北東部の地区の地名。旧東京市神田区。

B) 江戸時代（17-19 世紀）.からの歴史と伝統を引き継ぐ街。

C) 江戸から続く「神田祭」は、日本三大祭の一つで、コミュニティ形成の文化的インフラとなっている。江戸時代以降、日本三大祭の一つとされる神田祭が旧神田区を中心に浸透。2 年に一度、神田明神の氏子である 108 の町会が宮入する行事が有名。

D) 現在、神田を冠称する町名が多く見られるのは、千代田区発足時の町名変更の名残。

E) 神田明神の氏子としての町会の仕組みが相互扶助の地域防災を支えている。

F) 創業 100 年以上の老舗企業は 170 社。

G) 都心部最大の学生数（27 万人）を誇る学生街で、特に神田駿河台は、明治大学、日本大学等の大学が並ぶ学生街。

H) 最大の古書店街神保町を擁する（180 店舗）。出版社が 500 社以上。

I) 学生、研究者の集積。

J) 靖国通りに面した小川町はスポーツ店が並ぶ日本でも有数のスポーツ店街。

K) 学士会館（神田錦町）：1877（明治 10 年）、この地にあった東京開成学校と神田和泉町から本郷元富士町に移転していた東京医学校が合併して、東京大学が創立。1885（明治 18）年に本郷へ移転したが、この地を我が国最初の大学すなわち「東京大学発祥の地」とし、1991（平成 3）年には記念碑が建立された SRC 造による関東大震災後の復興建築で、平成 15 年には国の登録有形文化財に登録。

L) ニコライ堂（神田駿河台）：正教会の大聖堂。ニコライ堂は通称であり、日本に正教会の教えをもたらしたロシア人修道司祭ニコライに由来する。正式名称は、東京復活大聖堂。1962 年、国の重要文化財に指定。

M) 淡路町にはかんだやぶそば等、老舗がならび、江戸情緒が漂う通りが健在。

N) 神田駿河台は文字通り高台の地で、北は外神田、南は司町、美土代町、錦町に勾配が続く。

O) 近年は秋葉原、神保町、大手町にはさまれた空間として錦町、神田警察署通りの開発が進みはじめ、2020 年にむけた新たなまちのブランディングが進められている。

【課題】

A) 神保町、秋葉原の知名度と比較すると、特徴が散在しており全体の地域イメージがわきにくい。

B) 町会の独立性が高いがゆえに、横のつながりが十分ではない。

C) 新住民と旧住民とのつながりが希薄なところが多い。

第３章　東京文化資源区の具体化プログラム

今後本構想の具体化プログラムとして検討・実施すべき事項を下記に掲げる。

（１）特色ある文化資源の活用（文化プログラム）

① 古いビルのリノベーションコンペの実施

歴史的建造物に限らず、古い中小規模の商業ビルに着目し、その有効活用方法を競うコンペを毎年実施することによって、古い建造物をやみくもに建て直すのではなく、リノベーションによる活用の有用性を社会的にアピールし、CTN 内における現実のリノベーションの取り組みを促進する。都心南部・西部の巨大ビル開発と対比することによって、都心北部の建築文化資源再生の意義を示す。

② 湯島聖堂を拠点とした精神文化ルネサンス

日本の近世・近代精神文化の発祥の地ともいうべき湯島聖堂を核として、湯島を中心に CTN 内に多数存在する伝統ある宗教施設、大学、各種文化施設の人文学的伝統を再発見し、新しい日本、そしてアジアの精神文化創造の地となることをめざす。そのために、各施設が協同して取り組める精神文化普及プログラムの策定と順次実施を図る。

③ プロジェクトスクールの開設：文化資源を使いこなして社会課題を解決する知識専門職の養成・活用

CTN、そして最終的には全国において、文化資源活用を通じた地域課題解決を中心的に担える人材を養成するためのプログラムを開発・実施し、制度化の道筋をつける。すでに当地域内に多く存在する知識産業・知的業務従事者のリカレント教育から手がける。そのために、既存の大学、文化施設、情報・知識産業が連携する（MALUI 連携）学環としてのプロジェクトスクールを開設する。

④ プロジェクトスクールの活動の場、アーバンラボとしてのコミュニティアートセンター（仮称）の設置によるコミュニティ活性化と地域の創造的産業の創出

文化資源を活用した生活スタイルやビジネスの創造の場、さらにそれを担う人材を育成する場として、CTN 主要地域（将来的には全国）にアーバンラボとしての「コミュニティアートセンター」を設置する。これは、地域課題解決のための公共アーバンラボとして、また人材育成機関としてアート×産業×コミュニティの融合による創造活動の場として，国の事業としての展開を目指す。養成された人材は、東京を拠点に国内都市に配置され、技術、ノウハウの流動性を高めることとする。

⑤ 域内文化資源のアーカイブ化とデジタル化、その活用・発信

域内に豊富に存在する官・民の規模も様々な機関が保有・産出する多種多様な文化資源

（企業レコードを含む）のアーカイブ化・活性化・デジタル化・ネットワーク化を推進し、その中核となる国立デジタル・アーカイブセンター及び国立デザインミュージアムの設置を目標とする。

⑥ 新たな東京食文化の創造

江戸・東京の食文化の伝統と革新を活かした食材、飲食店等を発掘し、コスパや目新しさ中心の評価とは異なる、目利きによる新しいランキングの開発と世界的普及を図る。全国における地方食文化の再発見・創造の動きと連携する。

⑦ 文化資源観光の全国モデルとなる周遊ルートの開発

域内の特色ある各種文化資源の新たな魅力とその組み合わせの面白さを発見できる具体的な文化観光モデルルートを開発し、国内外に発信する。新しい ICT の開発を組み込む。

（2）文化プログラムを実現するための環境整備（環境プログラム）

1）東京文化資源区全体を歩ける回遊路の整備

東京文化資源区（神田・神保町から秋葉原・湯島・本郷・上野・谷中・根津・千駄木、根岸界隈）は、江戸城下にあっては武士や町人が参勤や商い、寺社参詣、季節の行楽で往来し、明治から昭和の東京では、鴎外、漱石、子規ら文豪、大観や画家たちが徒歩や都電などで行き来し交流したエリアである。今も文化施設や大学街、書店街、寺町などそれぞれのまちの特色があり、多彩な人々が住み暮らしているが、車両交通の増加、駅中心の拠点整備などで、「歩いて行き来できる街、地区間の魅力」が見えにくくなっている。

徒歩や自転車、コミュニティバスなど、比較的低速で、地域の様々な場所を回遊できるルートをつなげ、必要な整備をすることにより、東京文化資源区内の環境保全を諮り、人的文化交流も活性化していく。地区内在住在学在勤者はもとより、国内、海外から訪れる人も単なる観光スポットでの消費活動ではなく、地域の文化資源やその担い手の人々との交流の機会を増やす。

①歩いて気持ちの良い道の整備

（徒歩・低速交通網の改善、水と緑の保全、電線類の整理、沿道機能の充実）

1-徒歩・低速交通網の改善

域内を徒歩で歩きやすいルートを確保する。また自転車レーンへの配慮、千代田区・文京区・台東区をまたいで使えるレンタル自転車や各区コミュニティバスのネットワークづくりなどを検討する。

２-歩行者優先道路の検討、都市計画道路の見直し

域内では上野・谷中地区などにまちづくりとあわせて見直しを予定している都市計画道路がある。地域の文化資源と歩行者環境・景観保全を優先できるように計画を見直す。また公共の道路だけでなく、湯島聖堂、岩崎邸、東京大学、上野公園、東京芸術大学など施設敷地内もつないで回遊できるルートを検討する。

3-水と緑の保全

武蔵の台地崖線の斜面緑地の保全、神田川・日本橋川などの水辺と水上交通の復活、域内の元大名庭園や庭園、寺社の緑地、庭先・路地園芸の保全も含めて、水と緑に触れあいながら歩けるネットワークをつくる。

4-電線類の整理

交通安全や景観、文化資源保全にとって電線類を整理したほうが望ましいルートについては、電線類の地中化や軒下配線などの整備を検討する。

5-沿道機能の充実

回遊できる歩行者優先ルート沿道に、休憩できるポケットパーク的なスペースや静かなカフェ、江戸情緒を醸し出すしだれ柳、さくら、紅葉などの並木、江戸朝顔、ほうずき、和物花き類を並べた下町情緒の演出、にぎわいのある店や市、書店、ギ

ャラリー、図書館など、場所の特性に応じて適切な文化資源・文化活動が集積・連続するような民間事業、公民連携事業の展開を支援する。

②湯島天神神田明神ルートの整備

湯島天神・神田明神は東京文化資源区にとって地理的にも文化ルーツ的にも中心的な存在であるが、現状では周辺エリアから徒歩での行き来が少ない。このルートを積極的につなぐことにより、東京文化資源区全体の「歩いて気持ちのよいルート」全体をつなげ、顕在化していく。

2）伝統的建造物・文化資源の保全・活用（岩崎邸改修・再活用、谷中五重塔再建など）

・域内には江戸時代および明治以降の近世、近代の伝統的建造物が集積しており、文化財に指定されているものも多いが、生きた文化活動の場所として活性化していくことが望まれる。また民間・公共の伝統的建造物の保全活用を支援するしくみを創出する。

・湯島の「岩崎邸庭園」は現在洋館と和館と庭園が保存・公開され、文化イベント等も行われているが、本来の姿(財閥家当時の園芸生活―温室や菜園など―の場)の復原も含めての保全改修・再活用を提案していく。

・谷中五重塔はかつての江戸四塔のひとつであり、幸田露伴『五重塔』のモデルにもなった江戸東京の文化的シンボルである。昭和 32 年に焼失して以来、跡地が東京都史跡となっているが、その再建が地元では長年祈念されており、寄付の申し出も多い。東京の歴史文化を活かすまちづくりの象徴として、公的な寄付口座の設置、再建と管理活用が望まれる。

3）留学生・外国人観光客のための宿泊施設整備（既存ホテルのリノベーション、宿坊復活、古民家宿泊等）

・東京文化資源区は徒歩で行き来できる魅力あるエリアを目指すが、旅行者もゆっくり味わうためには数日から 1 週間程度の滞在ができる場所を増やす必要がある。

・大規模なホテルを新設するのではなく、既存のホテルのリノベーション、寺社の宿坊、古民家宿泊、ゲストハウス、個人経営旅館等、多様な生活文化、宗教文化を体験・交流できる宿泊施設の整備を支援する。

4）行財政制度の改革：規制緩和、規制強化、投資減税、基金創出等

東京では、防災安全対策や道路交通安全を優先してきたため、伝統木造等の歴史的建造物や路地などを残しにくい。また面的・総合的な文化資源保全活用のしくみ、エリアがない。長屋や町家と路地空間、伝統木造住宅と庭、樹木、看板建築、復興小学校等、生活文化を育んで来た空間資源は、地区に住み働く代々の人々の営みの証、誇りである。次世代や移住者、来街者にも地区の良さを伝え、持続的にまちを受け継いでいくために、空間文化資源をまちぐるみで安全に保全活用できるしくみをつくる。

①文化資源保全にむけた規制の緩和と強化

東京文化資源「特区」的な形で、歴史的建築物について建築基準法・消防法適用除外

条例×保全活用計画で守る条例を設ける。（例：京都、神戸、横浜等の条例）

例）誰でも扱いやすい消火栓の設置、伝統木造・歴史的建物にふさわしい耐震補強、定期的な維持管理、防火対策、地区消防団と住民、自治体・消防の連携等。

②文化資源保全活用特区

千代田区・台東区・文京区の全域の中で保全したい建物を特定するか、特定重点エリアを設けて、保全活用支援を行いやすくする。

まちぐるみの防災対策を行い安全性向上に配慮する。

③東京文化資源区の重点的なエリアの保全整備

地域と自治体が協働して先導できるエリアでは、歴史まちづくり法・歴史的風土維持向上計画などを適用し、域内の歴史的建物の保全活用を合法的に行える制度的な支援を行う。

④地域の民官産学が支えるファンド、融資等のしくみづくり

民間事業による歴史的建造物・資源の保全活用、リノベーション等を継続的に促進できる投融資、行政・民間共同出資の基金等の制度的仕組みをつくる。

１回限りの補助金でなく、低利融資等で自ら継続的に運営する視点を持つ。

例１） 中古民家、伝統木造、看板建築や古いビルの再生活用への融資、
ローンのしくみづくり
再生事業の審査＋融資（リノベーションコンペなどと連動）

例２）「地産地生」：まとまった土地を相続で手放さず、元の住人と新たに住む住民が住み合えるしくみ

都心部では、相続などを機に、家土地の外部事業者への一括売却・更地化→駐車場化 or 共同ビル化が増え、元住人が去り歴史と愛着ある家と庭などが失われやすい。

→住み継ぎを希望する地主の土地を一旦買取り、地主＋適切な人に分ける、あるいは共同事業を行うための「つなぎ融資」的な基金の創出。

→東京文化資源会議の活動趣旨に賛同する企業、資源区域内の地元企業等の出資を募り、文化資源保全に低利融資等ができるファンド（基金）を創出する。

５）コミュニティーベースのエリアマネジメントの体制の創出・強化

①文化資源のアーカイブ化と活用

- 地区内に集積されている文化資源（資料等）はまだ顕在化していないもの、大学や自治体、市民グループなど、ばらばらの担い手で調べた元資料のままで共有されていないものが多い。
- 地域の自主的な文化活動グループ、大学の研究室、自治体などが連携して、域内文化資源の総合アーカイブ化と活用できる場・システムづくりを目指す。

②担い手の育成・支援

- 上記の活動の担い手を育成・継続教育・ネットワーク化を支援していく。
- 地区の町会・商店会等の自治組織や氏子会、学校 PTA、図書館、古老や若手、子ども世代などが交流して文化資源の発見を行い、地区全体で文化資源活用の方向を共

有していく。例）「いいとこ探し」、「まちづくり交流会」等

・ 学生、大学研究室、地域の文化団体等が交流活動できる場を提供する。

・ 活動・研究の成果を、地域の文化資源の実際の保全活用事業に展開できる社会実験的な事業を行う。

例）中古民家や古いビルを活用した文化・飲食・宿泊・教育・福祉等複合的な文化拠点運営事業等。

（3）地域特性に応じた対応策（地域プログラム）

CTN 地域内で文化資源活用をめざす諸活動・組織との連携・協同を核として、地域や団体単独の活動では解決が難しい制度的課題等について今後中心的に取り組んでいく。

A.神保町活性化策

神保町を形成する各界の有志からなる「神保町活性化プロジェクトチーム（座長：高野明彦国立情報学研究所教授)」によって、すでに以下の活性化策が 2014 年 9 月にまとめられている。これらの提言を実現できるよう、神保町内の諸団体・活動との協力関係を強めていく。なお、提言の「１⑧マンガ連続講座」と、「１⑨神保町マンガ祭り」は「神保町絵本マンガ祭り」として、すでに今春（2015 年 3 月）に実施に移されている。また、「１⑩神保町各種文化資源の棚卸」については、神保町しらべ隊（仮称）が編成される予定である。

１．短期的取り組み

① 東京古書会館を核とする域内の交流・イベント施設の掘り起こしとネットワーク化・こまめなイベント開催（特に夜間）
② （仮称）寺子屋神保町」開設と周辺大学（明大、専大、日大、共立女子大等)、出版社等との連携
③ 神保町で開催されるイベント情報を中心とする神保町情報の一元化・発信強化
④ 「本と街の案内所」の機能拡充
⑤ 外国人対応の強化：街歩きパンフレット作成、海外発信、かるた等グッズ系店舗・飲食店との連携、外国人向けツアーの実施など
⑥ 古書店の日曜営業・夜間営業の漸次的拡大
⑦ 初心者（特に、子ども、若者、女性）向けイベントの開発
⑧ 「東京国際マンガミュージアム（仮)」の誘致とマンガ連続講座の開催
⑨ 神保町マンガ祭りの開催（2015 年以降毎春）
⑩ 神保町各種文化資源の棚卸（一覧化）

２．中長期的取り組み

① 主要古書店の日曜・週日夜間（例えば午後 9 時）までの一斉営業
② 丸の内から神保町への歩行者用道路整備（大丸有ビジネスパーソンの顧客化）
③ 神保町を舞台とするフィクション・キャラクターの取込み・イベント化
④ 宮内庁書陵部、三の丸尚蔵館、内閣文庫、天理ギャラリー、お茶の水図書館等貴重資料所蔵機関の公開促進・ネットワーク化と古書店との連携：古書ギャラリーの開設

B.谷根千・根岸一帯の協議体形成

本構想中間報告を受けて、地域の有志が呼びかけた「(仮称) 谷根千を思う会準備会」が本年（2015 年）2 月に開催され、谷根千地域（谷中・根津・千駄木・上野桜木・根岸等）で活動する各種文化関係団体が一堂に会した。谷中、根津、千駄木の各地域内での交流はそれまでにも盛んであったが、谷・根・千にまたがった団体の交流はほとんど初めての機会となった。そこでの協議を受けて、谷根千、さらに根岸などの隣接地域も含めて、地域の共通の文化資源や文化活動・地域活動に関わる問題に取り組む緩やかな協議体を設置していくことになった。

現在は、そのための企画会議及び関係団体が一堂に会する（仮称）ネットワーク会議の設立に向けての協議が関係者間で引き続き行われている。

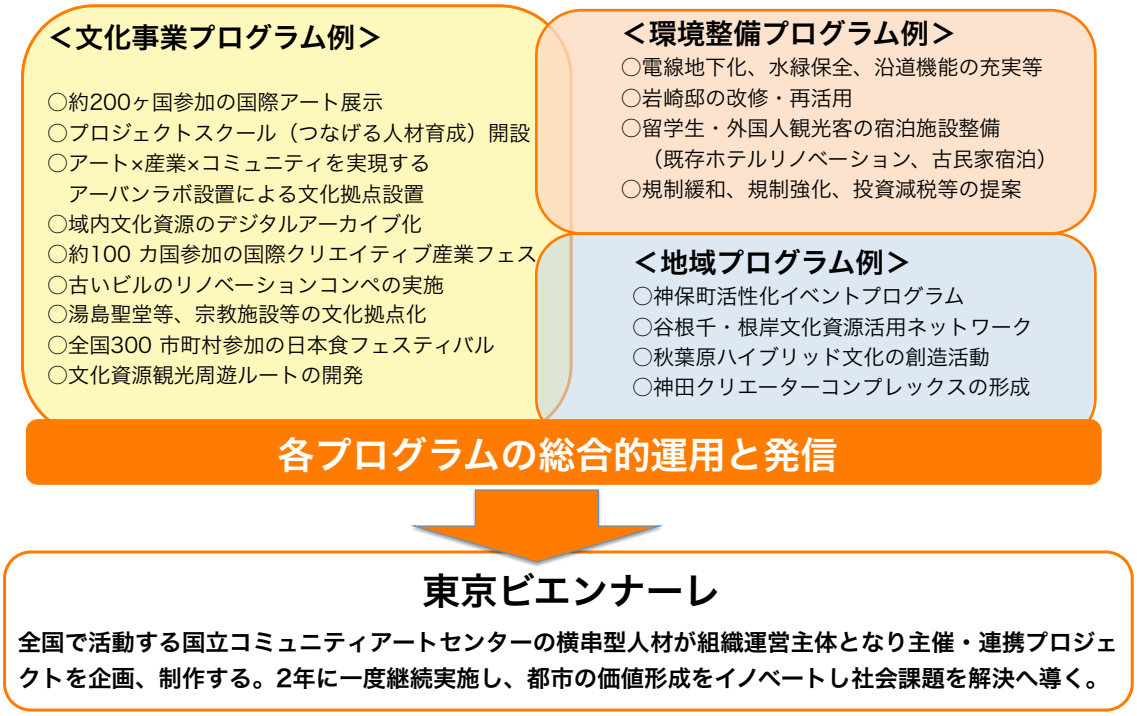
（4）東京文化資源区の総合的運用と発信　「東京ビエンナーレ」の実現

① 東京文化資源区で展開する各プログラムの集大成

前述の文化プログラム、環境プログラム及び地域プログラムの各プログラムの総合的運用と発信を強めていくため、その集大成として「東京ビエンナーレ（仮称）」を開催する。

具体的には、今後本構想の文化プログラムによって育成する、全国で活動する新しいプロジェクト課題解決型人材が組織運営主体となり、主催・連携プロジェクトを企画、制作する。2 年に一度継続実施し、都市の価値形成をイノベートし社会課題を解決へ導くことが狙いである。

東京文化資源区の具体化プログラム



東京ビエンナーレ

全国で活動する国立コミュニティアートセンターの横串型人材が組織運営主体となり主催・連携プロジェクトを企画、制作する。2年に一度継続実施し、都市の価値形成をイノベートし社会課題を解決へ導く。

② 社会課題を解決する東京ビエンナーレ

東京および日本の各地域における社会的課題は多く存在する。職場、地域等コミュニティの細分化によるつながりの欠如。ワークライフバランスの不均衡。メディアリテラシーの格差。 文化的価値観の齟齬といったくらしの課題。まちに目をむければ、都市過密化・地方過疎化、都市景観の没個性化、地域文化資源の埋没、国際的文化発信力の低下など、解決の難しい問題が山積みである。

こうした中、新たな時代ニーズに合った課題解決力に富む「人材」の育成と、それを活かす「しくみ」と「拠点」の必要性が増しており、あらゆる分野においても地域社会に溶け込む人間力が問われているのが現在の社会である。

「東京ビエンナーレ」とは、こうした社会課題をアート×産業×コミュニティの融合を通して解決へと導く社会創造型のプロジェクトである。

③　横串をさす人材の育成と活躍の場

組織や専門性を横断し、横のつながりをつくることができる人材にはコミュニケーション力、現場力／ネットワーク力などが必要と思われるが、縦社会に横串をさす人材をいかにして育成していくのか、社会課題を解決していくには、どのような実践を重ねていき、知識と経験を生み出し組織的で持続的に活動していくのかが問われている。

「東京ビエンナーレ」は、２年に一度のイベントとその間の各種準備調整、関連プログラムの実施等、様々な現場を設定し、専門性を持ちつつ様々なジャンルを横断する人材の育成・活躍の場として展開する。

④　企画制作運営主体としてのコミュニティアートセンター

「東京ビエンナーレ」の企画制作運営は、スクールプログラム等を行う「コミュニティアートセンター（仮称)」が行う。

コミュニティアートセンターは、世界に誇る東京文化資源区を拠点とし、グローバルな視点を持つ社会課題の解決を担う人材を育成する機関として、様々な文化、環境、地域プログラムの企画制作運営を行う機関である。関わる人材は国内各都市から派遣され、人材の流動性を高めることを目指しており、地域という２つの場を行き来し活動することで、日本の新しいライフワークバランスをもつ社会観を創生することが期待される。

「東京ビエンナーレ」はそうした活動の集大成として位置づけられ、様々な人々が関わるプロジェクトとして、東京文化資源区内を中心に大小活動拠点を設定し、企画運営を行っていくこととする。

＜コミュニティアートセンターの３つの活動＞

１）　各都市の文化資源によるコンテンツの再生・発信、課題解決を促す社会プロジェクトを企画・制作する。

２）　産官学民の機関が連携する新しい学環型スクール。課題解決のための社会プロジェクトに実践的に参加し学ぶスクールプログラム。

３）　隔年で東京と地域において大型のフェスティバルを開催。地域創生力と人間力、地域経済の自律力を高める。

⑤　東京ビエンナーレの実施プログラム

都市の課題を新たな解決へと導く都市創造型国際プロジェクトとして、主催、連携会場で大中小様々な規模の 10,000 のプログラムを実施する。

会場は、東京文化資源区内の様々な施設とし、文化資源区内の主要エリア(谷根千、根岸、上野、本郷、湯島、神田 秋葉原、神保町など)+大丸有、日本橋等エリアにおいてプロジェクト拠点を設置。大小多様な 10,000 のイベントを開催する。

拠点例:神田神社、湯島聖堂、ニコライ堂、WATERRAS、mAAchecute 神田万世橋、3331 Arts Chiyoda、近代美術館 東京芸大、東大、その他エリア内公園、空きビル等

⑥　メインプログラム例

１）アートからのアプローチ

200 ヶ国参加の国際アート展：

各国大使館等と連携し代表アーティストを選出し、ビエンナーレ賞も設定する。文化資源区内自主展覧会と連携した大規模な国際展覧会を空きビルを活用して実施。アーティストとまちとの関係づくりによって、都市と人との文化的価値形成のプロセスを体験する。

２）産業からのアプローチ

100 ヶ国参加の国際クリエイティブ産業フェスティバル：

全世界のものづくり、クリエイティブ産業をリードする商品、プロジェクトの展示・商談の場を設定する。ここでもビエンナーレ賞を設定し、関連する事業者にとって新たな世界的アピールの場となるよう設定を行う。文化資源区内自主イベントとも連携し、様々なクリエイティブ産業の担い手をつなげ、新たな事業の芽を生成させていく。

３）コミュニティからのアプローチ

A.300 市町村参加の日本食フェスティバル：

日本の文化資源の世界へのアピールと共有を図る。全国の特色ある日本食の総合的イベントを実施。評価基準を設け表彰。世界中の日本食文化育成スキームの策定により、世界に誇る日本食のグローバルスタンダートをつくっていく。

B.精神文化の復権：大学、宗教施等の活用と湯島聖堂の再生：

精神文化普及プログラムの策定と実施。その東アジアセンターとしての湯島聖堂再生計画を展開。

⑦　継続プログラム例

A.ソーシャルプロジェクトスクール：

社会課題の解決を担う新しい専門職人材の育成をする。実際のプロジェクトを経験しながら学ぶ新しいスクール。

B.東京リノベーションコンペ：

歴史的建造物の復元・有効活用方法を世界コンペ形式で策定し実施。

C.新たな東京文化観光モデルの実現：

周遊ルートの企画開発と運用を通じて新たな東京文化資源区の魅力の発見と活用を促す仕組みを構築する。

D.散在するアーカイブの整備とデジタル化・ネットワーク化：

新たな文化資源を活用していくための文化資源アーカイブを構築。必要な資源を必要な場所へと流通させるためにも、デジタル化の促進等利用環境の整備が必要である。

E.在住外国人の参画と国際交流推進：

海外留学生を人材育成システムに取り入れる等、人的流動性を高めるとともに、外国人観光客の快適な滞在を促す、既存建物リノベーション等で宿泊施設の整備を行う。

⑧　東京ビエンナーレが社会課題を解決へと導く

1）　国際展としての東京発世界発信の継続展開を図ることによって、文化資源による都市コンテンツ力の再生を進めていく。

2）　街の歴史を背負うスペースを、人が住み、活動する賑わいの場所に転換することで、職住遊の融合によるワークライフバランスの充実が図られ、地域文化拠点設置による新たな人の流れの生成もおこることが期待される。

3）　組織の壁を越えて人をつなげる人材の育成と活躍のきっかけとプロセスを共有することが可能となる。

（5）京都文化資源活用構想との連携と全国展開

2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けての日本文化の発信をめざした「オリンピックと文化懇談会（座長：長尾真京都大学名誉教授・東京文化資源会議顧問）」の提言（2014 年 2 月）を受け、京都府と京都市が協同して検討会議を立ち上げた。本年 5 月に文化資源を活用した京都の文化観光に関わる提言をまとめる予定であり、本構想に基づく東京の文化観光がそれと相乗作用を及ぼせるよう、連携を図っていく。

また、静岡、新潟、沖縄など各地で文化資源を活用した地域活性化を図る動きがあり、それらの関係者との連携を促進するための連絡会の設置をめざす。

第４章　これからの取組と推進主体

（１）想定スケジュール

第１ステージ（2014 年～2016 年）

1．2014 年

6 月　「東京文化資源区構想策定委員会」（座長：伊藤滋早大特命教授）発足

10 月　構想中間報告案発表（第 1 回ラウンドテーブル開催と同時）

TRANAS ARTS TOKYO 2014 開催

12 月　構想の推進母体となる「東京文化資源会議（仮称）」設置準備会開催

2．2015 年

2 月　「東京文化資源会議（以下、「会議」と略）」設立総会

5 月　構想最終報告とりまとめ

「東京文化資源区構想」第 1 回公開シンポジウム開催

6 月　会議第 1 回役員会・総会開催

10 月　会議の文化プログラム・環境プログラム骨子とりまとめと公表

11 月　文化資源による地域活性化に取り組む国内各都市との全国連絡会開

第 2 回公開シンポジウム開催

・東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムへの計画提案

・セミナー等独自企画実施、各地域文化資源活性化活動との連携

3．2016 年

・文化プログラム・環境プログラムの順次実施

・東京ビエンナーレ企画委員会発足

・第 1 回「文化資源による都市活性化世界会議」の開催（世界文化都市指標の開発）

・国、都、3 区、大学、民間組織等が連携した「東京文化資源区推進委員会（仮称）」等新しい推進体制の編成準備

・秋以降、東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムの企画・実施支援

・セミナー等独自企画実施、各地域文化資源活性化活動との連携

第２ステージ（2017 年～2020 年）

1．2017 年

・「2020 年東京ビエンナーレ（仮称）」開催準備組織発足

・東京オリンピック文化プログラムの実施支援

・民官産学連携の「東京文化資源区推進委員会（仮称）」発足

・東京文化資源区の文化特区案とりまとめ
・「TRANAS ARTS TOKYO 2017」開催
・東京文化資源区内での地域・団体活動との連携イベントの開催

２．2018 年
・「東京ビエンナーレ」実行委員会発足
・東京文化資源区の文化特区適用
・プレ「東京ビエンナーレ」開催（リノベーション・コンペの本格実施）
・東京文化資源区内での地域・団体活動との連携イベントの継続実施

３．2019 年
・「東京ビエンナーレ」開催準備
・東京オリンピック文化プログラムとの連動事業実施
・文化特区を利用した各種規制緩和・規制強化、孤児作品対策特別法等の試行
・東京文化資源区内での地域・団体活動との連携イベントの拡大・継続実施

４．2020 年
・「第 1 回東京ビエンナーレ」の開催
・対象域内に景観法を適用
・東京ビエンナーレに連動した文化資源による都市活性化世界会議の開催
・東京オリンピック•パラリンピック文化プログラムとの連動事業実施
・東京文化資源区内での地域・団体との連携イベントの集中的開催

<u>第３ステージ（2021 年～2030 年）</u>

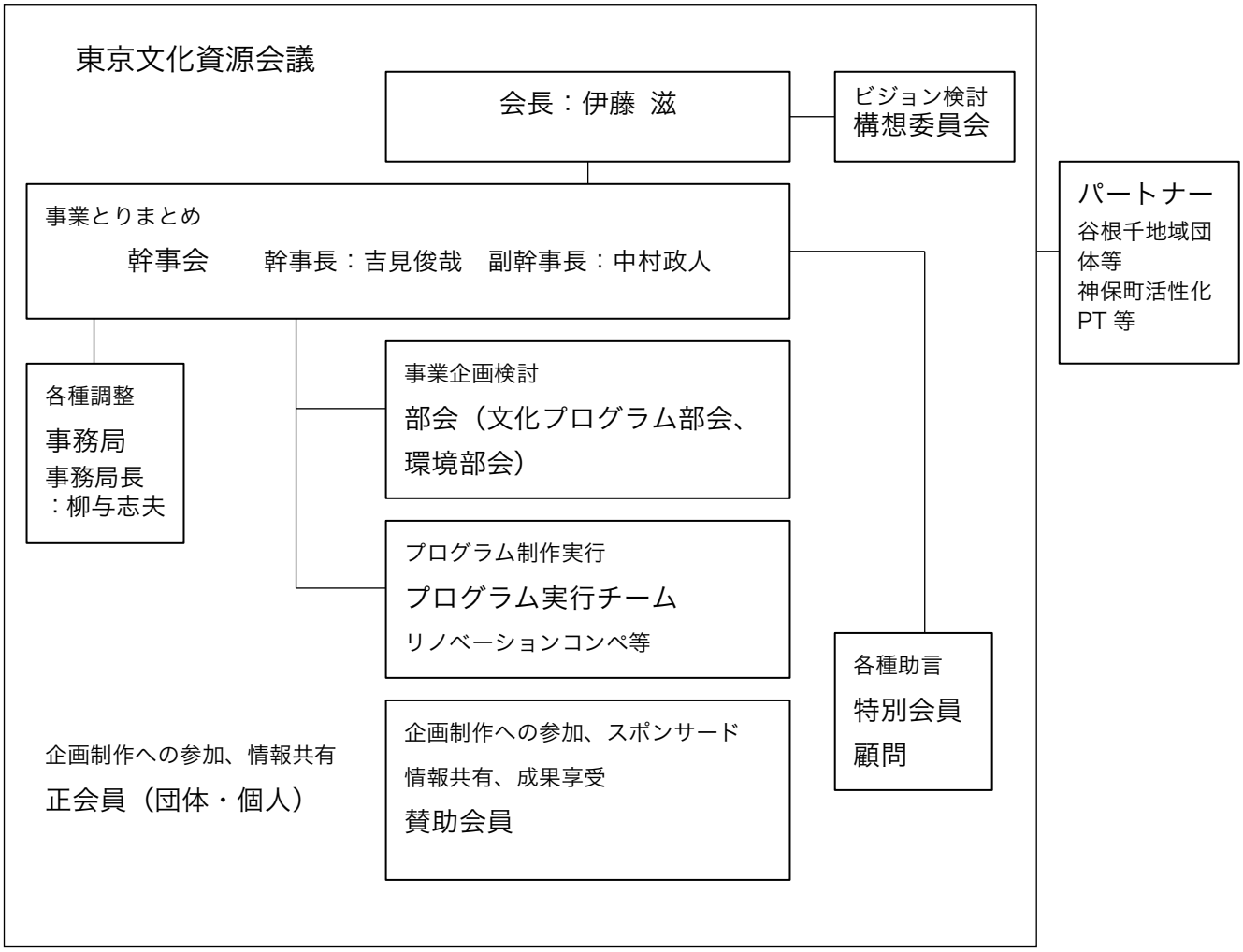
・「東京ビエンナーレ」実行組織の恒常的運営体制確立と継続的事業展開
・「東京ビエンナーレ」の国際的認知度向上のためのプロモーション事業実施
・アート×産業×コミュニティが連動する「東京ビエンナーレ」モデルの確立と普及
・東京ビエンナーレの隔年開催

（2）今後の推進体制

東京文化資源会議（構成は下記組織図を参照）及び 2018 年の設置を想定する民産官学連携の組織「東京文化資源区推進委員会（仮称）」を中心に、構想の実現を順次図っていく。

■ 東京文化資源会議　推進体制

東京文化資源会議は、
会長の下に幹事会を置き、東京の文化資源を生かした様々な事業の企画と一部実施を行う。



構想委員会は、
会長の下に置き、前年度からの「文化資源区構想委員会」を継承し、東京文化資源会議のビジョン策定を行う。

特別会員として、
顧問、パートナーを位置づけ、随時個別に意見、助言を得ることとする。

部会は、
具体的なプログラム等の企画検討を行い、その実行部隊として個別にプログラム実行チームを編成し、実施にあたる。

パートナーとは、
谷根千、神保町等の各地域にて独自に組織された企画実行組織を想定しており、プログラムの企画実施において、連携、協力を図ることとする。

正会員は、
具体的なプログラムへの参加、助言等を行うとともに、当会議での検討内容、実施成果の情報を得る。

賛助会員は、
会の運営のためのスポンサードとともに、具体的なプログラムの企画参加、助言等を行い、当会議での検討内容、実施成果の恩恵を受ける。

幹事会は、
構想委員会でのビジョンと部会でまとめられたプログラム提案をまとめ、特別会員、顧問を通じて、国、東京都に対して働きかけ、2016 年からの東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムとしての位置づけ、予算化へと進め、2020 年以降の継続的展開のための組織づくりを図っていくこととする。

■　資料

資料目次

（１）東京文化資源区構想策定調査委員会・委員名簿

（２）東京文化資源区内の文化財情報図

（３）地域文化資源連携活用のダイアグラム・イメージ：谷根千の事例

（1）東京文化資源区構想策定調査委員会・委員名簿

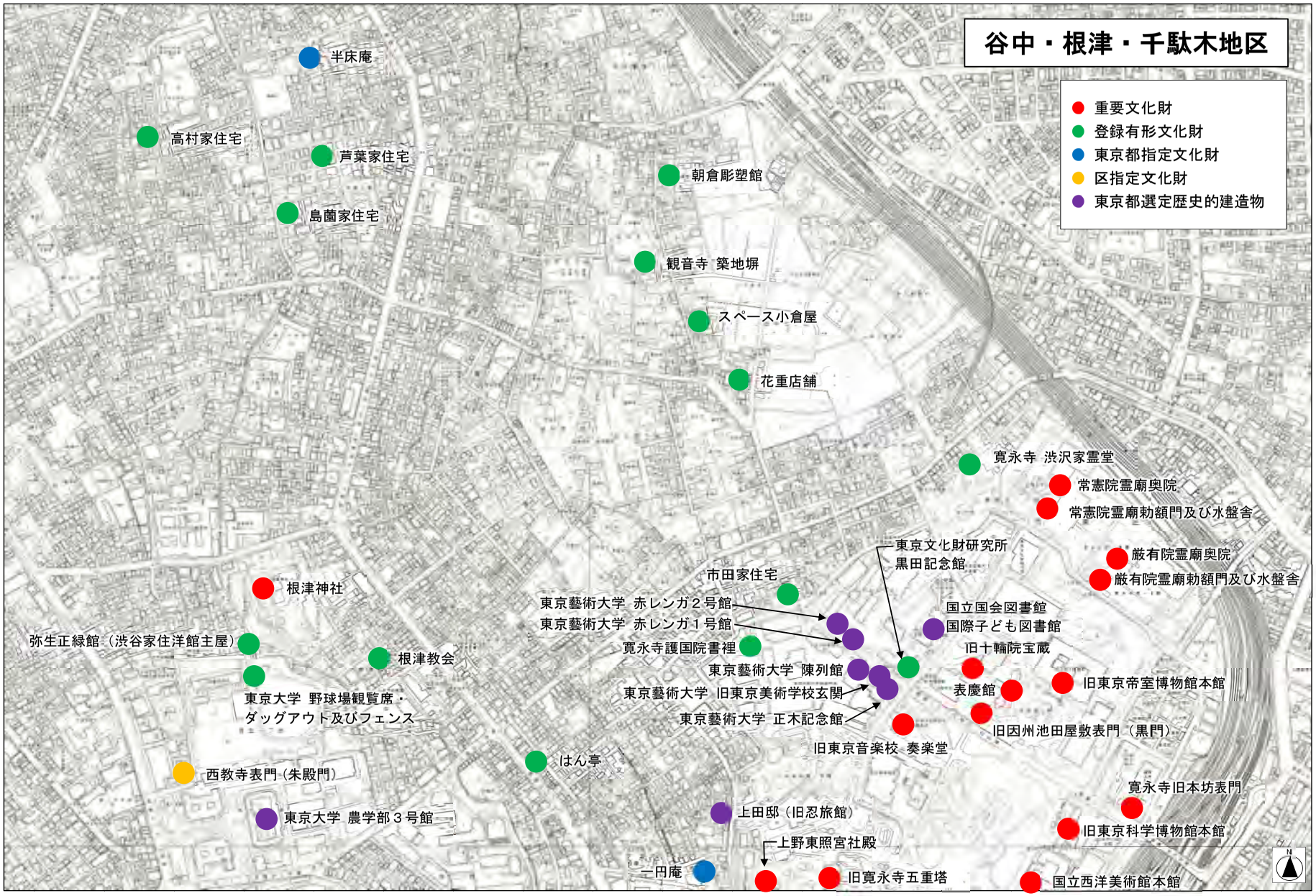
青山　佾（やすし）		明治大学公共政策大学院 教授
伊藤　滋	◎	早稲田大学 特命教授
隈　研吾		東京大学工学部建築学科 教授
小泉　秀樹		東京大学大学院工学系研究科都市工学科 教授
小林　正美		明治大学理工学部建築学科 教授
進士　五十八		東京農業大学名誉教授
杉本　博司		写真家・現代美術家
高野　明彦		国立情報学研究所 教授
中村　政人		東京藝術大学 教授
西村　幸夫		東京大学先端科学技術研究センター　所長
廣瀬　通孝		東京大学大学院情報工学系研究科 教授
福島　幸宏		京都府立図書館副主査
森　まゆみ		作家
森川　嘉一郎		明治大学国際日本学部 准教授
八木　壮一		株式会社 八木書店 代表取締役会長
吉見　俊哉		東京大学大学院情報学環　教授

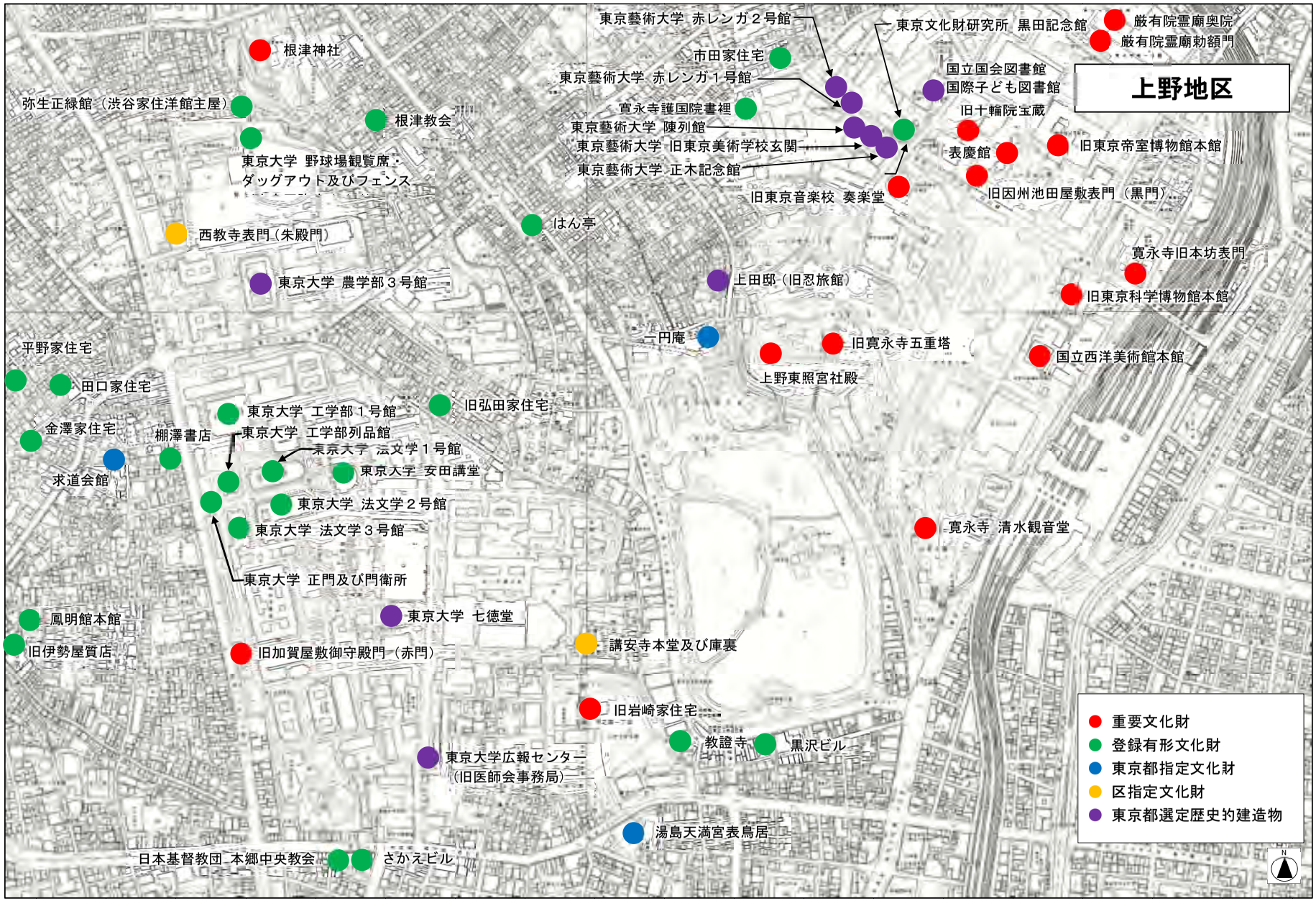
（五十音順、敬称略、◎座長）

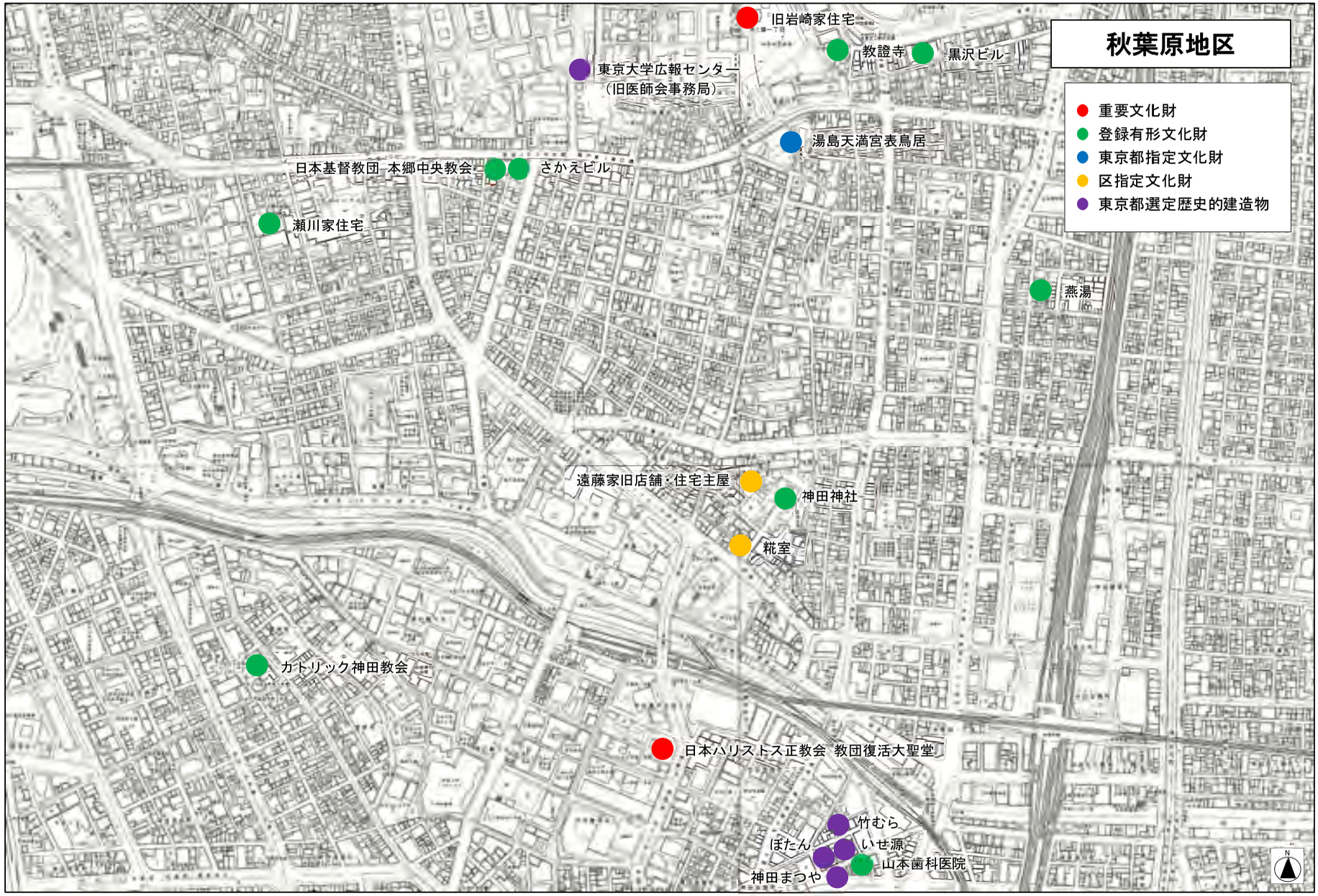
（２）東京文化資源区内の文化財情報図

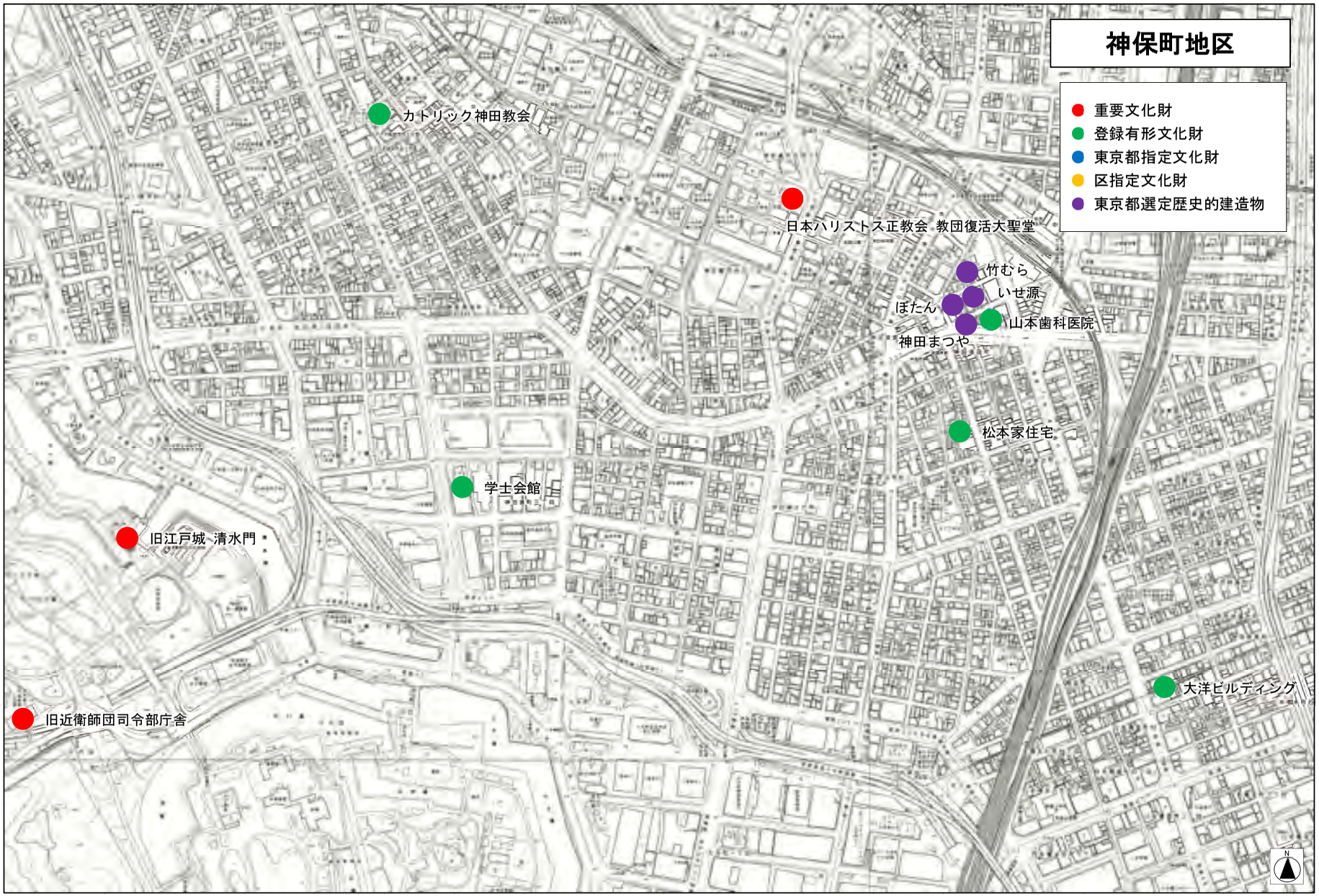
東京文化資源区内の文化財情報図

	台東区	文京区	千代田区
世界遺産	（候補）国立西洋美術館本館		
重要文化財	常憲院霊廟奥院、常憲院霊廟勅額門及び水盤舎、厳有院霊廟奥院、厳有院霊廟勅額門及び水盤舎、旧十輪院宝蔵、旧東京帝室博物館本館、表慶館、旧因州池田屋敷表門（黒門）、旧東京音楽校 奏楽堂、寛永寺旧本坊表門」、旧東京科学博物館本館、上野東照宮社殿、旧寛永寺五重塔、国立西洋美術館本館、寛永寺 清水観音堂、旧岩崎家住宅	根津神社、旧加賀屋敷御守殿門（赤門）	日本ハリストス正教会 教団復活大聖堂、旧江戸城清水門、旧近衛師団司令部庁舎
東京都指定文化財	一円庵	半床庵、求道会館、湯島天満宮表鳥居、求道会館	なし
区指定文化財	なし	西教寺表門（朱殿門）、講安寺本堂及び庫裏	遠藤家旧店舗・住宅主屋、糀室
登録有形文化財	朝倉彫塑館、観音寺 築地塀、スペース小倉屋、花重店舗、寛永寺 渋沢家霊堂、市田家住宅、寛永寺護国院書裡、東京文化財研究所 黒田記念館、教證寺、黒沢ビル、燕湯	高村家住宅、芦葉家住宅、島薗家住宅、弥生正緑館（渋谷家住洋館主屋）、旧弘田家住宅、根津教会、はん亭、東京大学 野球場観覧席・ダッグアウト及びフェンス、東京大学 工学部１号館、東京大学 工学部列品館、東京大学 安田講堂、東京大学 法文学１号館、東京大学 法文学２号館、東京大学 法文学３号館、東京大学 正門及び門衛所、新町館（三宅家住宅）、橋本家住宅、平野家住宅、田口家住宅、金澤家住宅、棚澤書店、鳳明館本館、旧伊勢屋質店、さかえビル、日本基督教団 本郷中央教会、瀬川家住宅	神田神社、カトリック神田教会、学士会館、山本歯科医院、松本家住宅、大洋ビルディング
東京都選定歴史的建造物	東京藝術大学 赤レンガ１号館、東京藝術大学 赤レンガ２号館、東京藝術大学 陳列館、東京藝術大学 旧東京美術学校玄関、東京藝術大学 正木記念館、国立国会図書館国際子ども図書館、上田邸（旧忍旅館）	東京大学 農学部３号館、東京大学 七徳堂、東京大学広報センター（旧医師会事務局）	竹むら、いせ源、ぽたん、神田まつや


谷中・根津・千駄木地区
重要文化財
登録有形文化財
東京都指定文化財
区指定文化財
東京都選定歴史的建造物
半床庵
高村家住宅
芦葉家住宅
朝倉彫塑館
島薗家住宅
観音寺 築地塀
スペース小倉屋
花重店舗
寛永寺 渋沢家霊堂
常憲院霊廟奥院
常憲院霊廟勅額門及び水盤舎
厳有院霊廟奥院
厳有院霊廟勅額門及び水盤舎
東京文化財研究所
黒田記念館
市田家住宅
根津神社
東京藝術大学 赤レンガ２号館
東京藝術大学 赤レンガ１号館
国立国会図書館
国際子ども図書館
弥生正緑館（渋谷家住洋館主屋）
寛永寺護国院書裡
旧十輪院宝蔵
根津教会
東京藝術大学 陳列館
東京大学 野球場観覧席・
ダッグアウト及びフェンス
東京藝術大学 旧東京美術学校玄関
表慶館
旧東京帝室博物館本館
東京藝術大学 正木記念館
旧因州池田屋敷表門（黒門）
旧東京音楽校 奏楽堂
はん亭
西教寺表門（朱殿門）
寛永寺旧本坊表門
東京大学 農学部３号館
上田邸（旧忍旅館）
旧東京科学博物館本館
上野東照宮社殿
一円庵
旧寛永寺五重塔
国立西洋美術館本館
N


上野地区
東京藝術大学 赤レンガ２号館
東京文化財研究所 黒田記念館
厳有院霊廟奥院
厳有院霊廟勅額門
根津神社
市田家住宅
国立国会図書館
国際子ども図書館
東京藝術大学 赤レンガ１号館
弥生正緑館（渋谷家住洋館主屋）
寛永寺護国院書裡
旧十輪院宝蔵
根津教会
東京藝術大学 陳列館
東京藝術大学 旧東京美術学校玄関
表慶館
旧東京帝室博物館本館
東京大学 野球場観覧席・
ダッグアウト及びフェンス
東京藝術大学 正木記念館
旧東京音楽校 奏楽堂
旧因州池田屋敷表門（黒門）
はん亭
西教寺表門（朱殿門）
寛永寺旧本坊表門
東京大学 農学部３号館
上田邸（旧忍旅館）
旧東京科学博物館本館
円庵
旧寛永寺五重塔
国立西洋美術館本館
平野家住宅
上野東照宮社殿
田口家住宅
東京大学 工学部１号館
旧弘田家住宅
金澤家住宅
棚澤書店
東京大学 工学部列品館
東京大学 法文学１号館
求道会館
東京大学 安田講堂
東京大学 法文学２号館
東京大学 法文学３号館
寛永寺 清水観音堂
東京大学 正門及び門衛所
鳳明館本館
東京大学 七徳堂
旧伊勢屋質店
旧加賀屋敷御守殿門（赤門）
講安寺本堂及び庫裏
旧岩崎家住宅
教證寺
黒沢ビル
東京大学広報センター
（旧医師会事務局）
湯島天満宮表鳥居
日本基督教団 本郷中央教会
さかえビル
重要文化財
登録有形文化財
東京都指定文化財
区指定文化財
東京都選定歴史的建造物
N


秋葉原地区
重要文化財
登録有形文化財
東京都指定文化財
区指定文化財
東京都選定歴史的建造物
旧岩崎家住宅
教證寺
黒沢ビル
東京大学広報センター
（旧医師会事務局）
湯島天満宮表鳥居
日本基督教団 本郷中央教会
さかえビル
瀬川家住宅
燕湯
遠藤家旧店舗・住宅主屋
神田神社
糀室
カトリック神田教会
日本ハリストス正教会 教団復活大聖堂
竹むら
ぼたん
いせ源
山本歯科医院
神田まつや
N

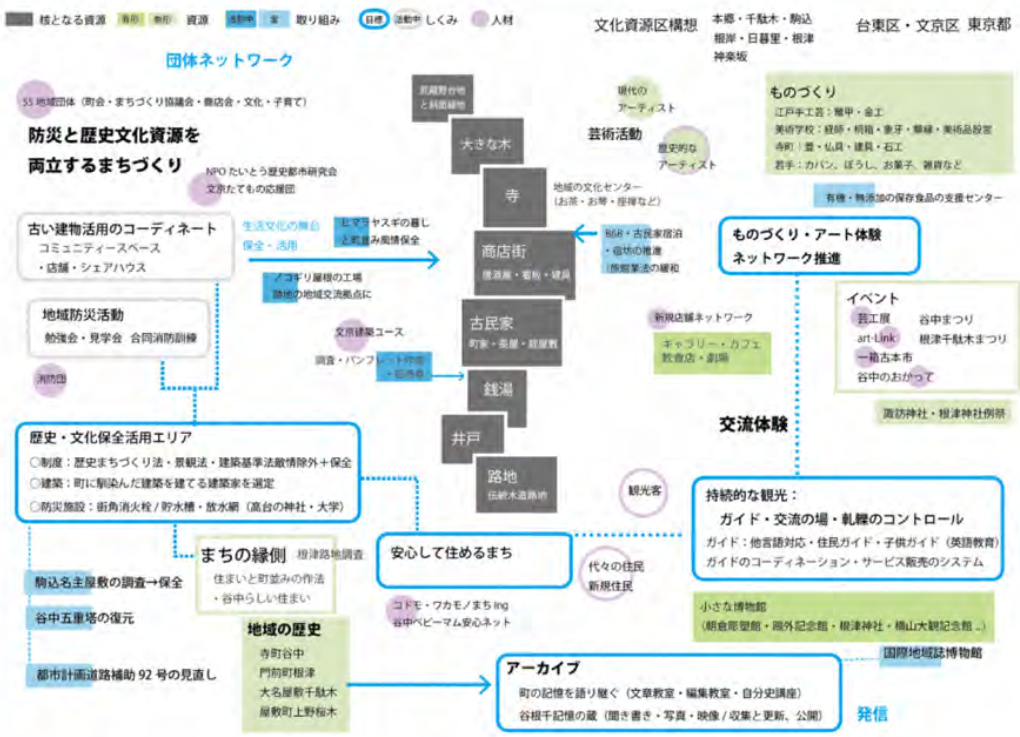

神保町地区
重要文化財
登録有形文化財
東京都指定文化財
区指定文化財
東京都選定歴史的建造物
カトリック神田教会
日本ハリストス正教会 教団復活大聖堂
竹むら
いせ源
ぼたん
山本歯科医院
神田まつや
松本家住宅
学士会館
旧江戸城 清水門
旧近衛師団司令部庁舎
大洋ビルディング

（3）地域文化資源連携活用のダイアグラム・イメージ：谷根千の事例

■　谷中・根津・千駄木界隈（谷根千地区）の文化資源の活動状況と目標

図は地域の文化的資源と活動主体と人材、文化資源区につながる目標と仕組み、取り組みの状況の関係性を整理したものである。通称、谷根千地区では、文化・環境に関する活動の地道な積み重ねがあり、それが新たな地域の資源の創出に結びついている。大きな木や寺、商店街と古民家、銭湯、井戸、路地といったまちの生活の風景とそこでの生活、芸術とものづくりの場としての歴史という文化資源に対し、文化プログラムにあたる体験・交流の活動、環境プログラムにあたる防災と歴史文化資源の保全・活動の取り組み、安心して楽しく暮らすためのより生活に密着した活動があり、それぞれの問題意識にゆるやかなつながりがみられる。谷根千地区では、地域としての守りたいものや防ぎたいことを共有し、文化資源の危機と保全・活用の機会に対する感度を上げ、これまでそれぞれの活動で培われた知識や経験、人のつながりを新たな問題の解決や活動の展開に活かせるようにするために、これらの活動の間にゆるやかなネットワークの形成とアーカイブの構築・活用に取り組んでいく。

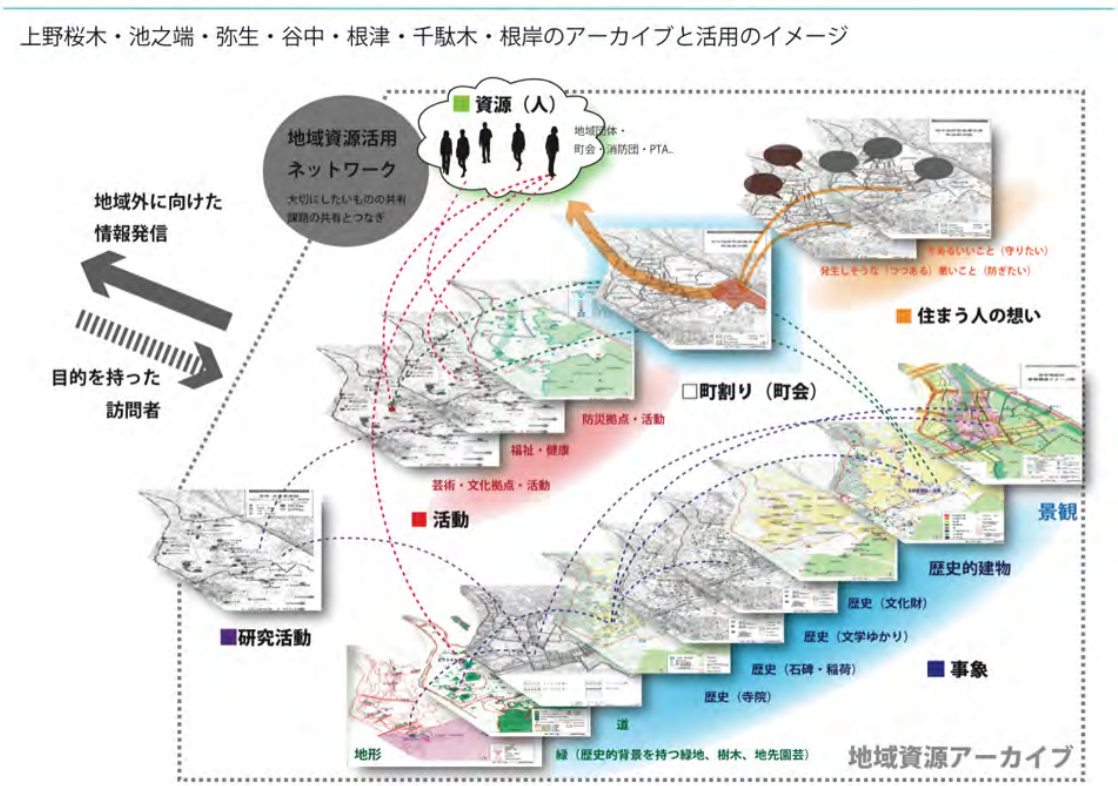
谷根千の文化資源と活動の状況と活動の目標



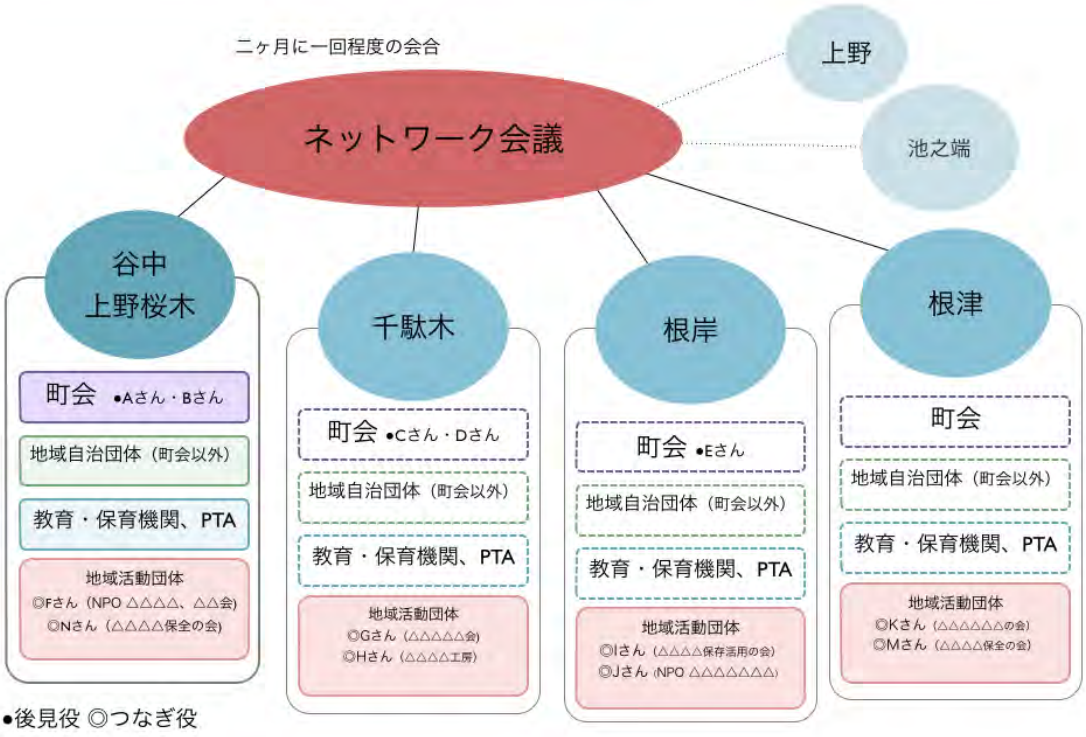
■ 地域資源アーカイブのイメージ

地域資源アーカイブは、地域内で大切にしたいものや課題を共有し人をつなげること、目的を持った訪問者の来訪を促すための情報発信に資することを目指すものである。特に本地域では、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」(1984-2006)や、谷中地区まちづくり基礎調査（平成 14 年、台東区・東京芸術大学）を通じて、資料の収集と基礎的な整理が行われている。アーカイブでは、まずこれらの資料を今後の活動に活かすこと、また、緑、道、歴史的建造物といった空間的な要素と地域内の活動の対象や活動の実績（失敗事例も含め）とを結びつけることで、事象を介して人のネットワークに到達するような仕組みづくりを目標とする。ワークショップを通じて、地域を把握するためのアーカイブのカテゴリーのあり方、アーカイブサイトとしての運営の手法を検討し、地域資源に関わるアーカイブ活動としての一つのモデルを示す。

地域資源アーカイブのイメージ



■ 「(仮称) やねせんを想う会」：活動ネットワークのイメージ

谷根千地区では、地域の安心で楽しい暮らしが、文化資源区としての基本となる。生活者の気持ちや気付きを反映するために、谷根千のなかでも谷中・上野桜木、千駄木、根津、根岸などの地区を基本的な活動単位として、これを基盤に谷根千地区としてのネットワーク会議を組織する。それぞれの地区では、町会、消防団などの自治団体、PTA や教育・保育機関といった団体と地域の様々な世代の活動団体とのネットワークを構築し、ネットワーク会議では、地区をよく知るキーパーソンを後見役に、機動力のある活動団体のメンバーをつなぎ役としながら、谷根千地区としての情報共有や文化資源区としての活動との連携を図る。

やねせんを想う会：ネットワークイメージ